

丙午紀行

160  
94

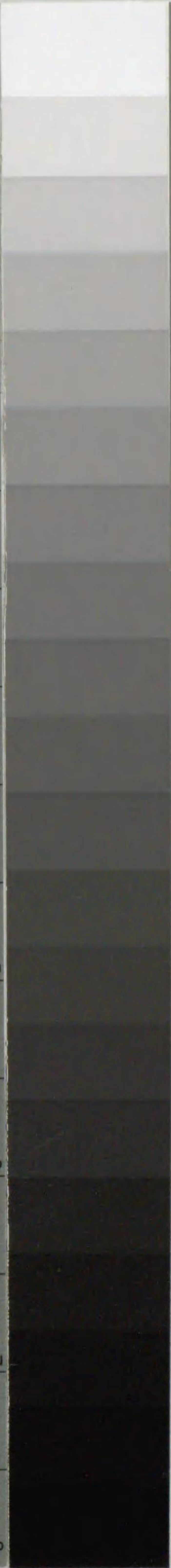
160-941  
\*1200800011780\*

# Kodak Gray Scale



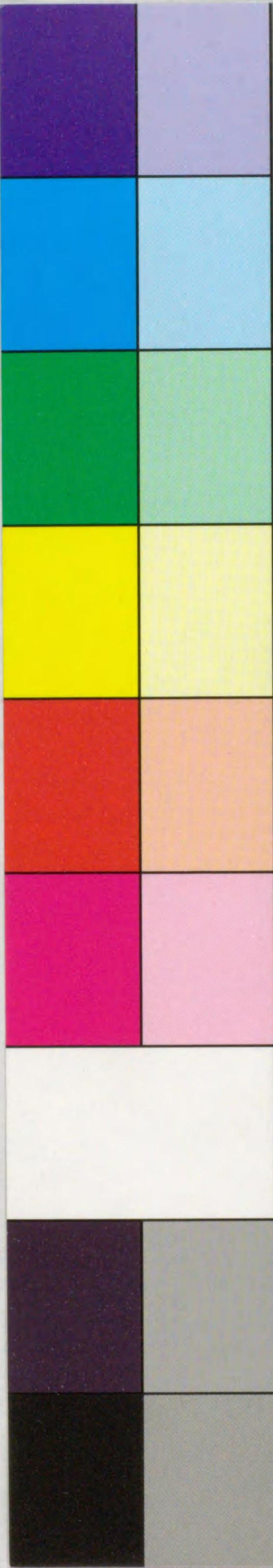
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

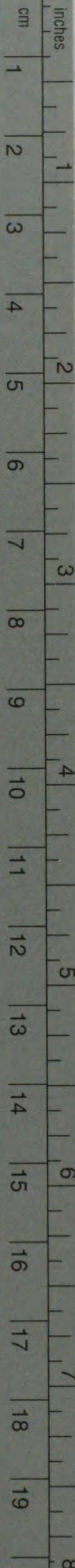


# Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak





丙午紀行

松岡其盛





兩本記

竹山隸古



行冠东北  
世学街笃



德富蘇峯先生書





存  
今見典  
等孫  
型



大正壬戌九月

大國后文平世官三叔





竹越三又先生書

立碑毀碑如易著  
一卷長留天地間



題丙申年行  
受





柳園上道于彼高岡  
有斐周子令聞念望  
亦賜祖廟夢寐多夢  
壬戌之春謹題 丙午紀行為  
佐藤密君索竹山高田忠周

高田竹山先生畫讚





高田竹山先生書

歷游世云不通風物  
好和視以流高懷  
暢然筆在神

竹山先生書





今泉神宮奉齋會長咏草

あぢちをら  
完  
あぢちをら  
に  
あぢちをら  
道  
あぢちをら  
あぢちをら



星野行則氏書

鷲志揚門風

大正十一年十一月十日

川馬之禮書





壬戌秋杪  
石牛  
行旅  
畫  
鬼谷先生  
畫

日下部草壁先生畫識





日下部草壁先生書



讀丙午紀行

鞋襪輕煖不少

留歷山之中有

餘物游篇讀



了為深哉文外  
何心紙上浮

壬戌秋杪  
羊歷抄字





葉多野長三道人書

程

人寫  
山一  
身

長  
之  
人





佐藤桃園先生肖像（高橋勝藏筆 田村顯允氏題讚）



修亮翁七渡九年今孫當示翁肖  
像清氣肅然與翁親交不泯  
乃贊曰  
自愛嚴肅為人溫和盡力  
公事傍嗜和歌移家北海  
歸老隈阿壽八十八孫枝  
著多

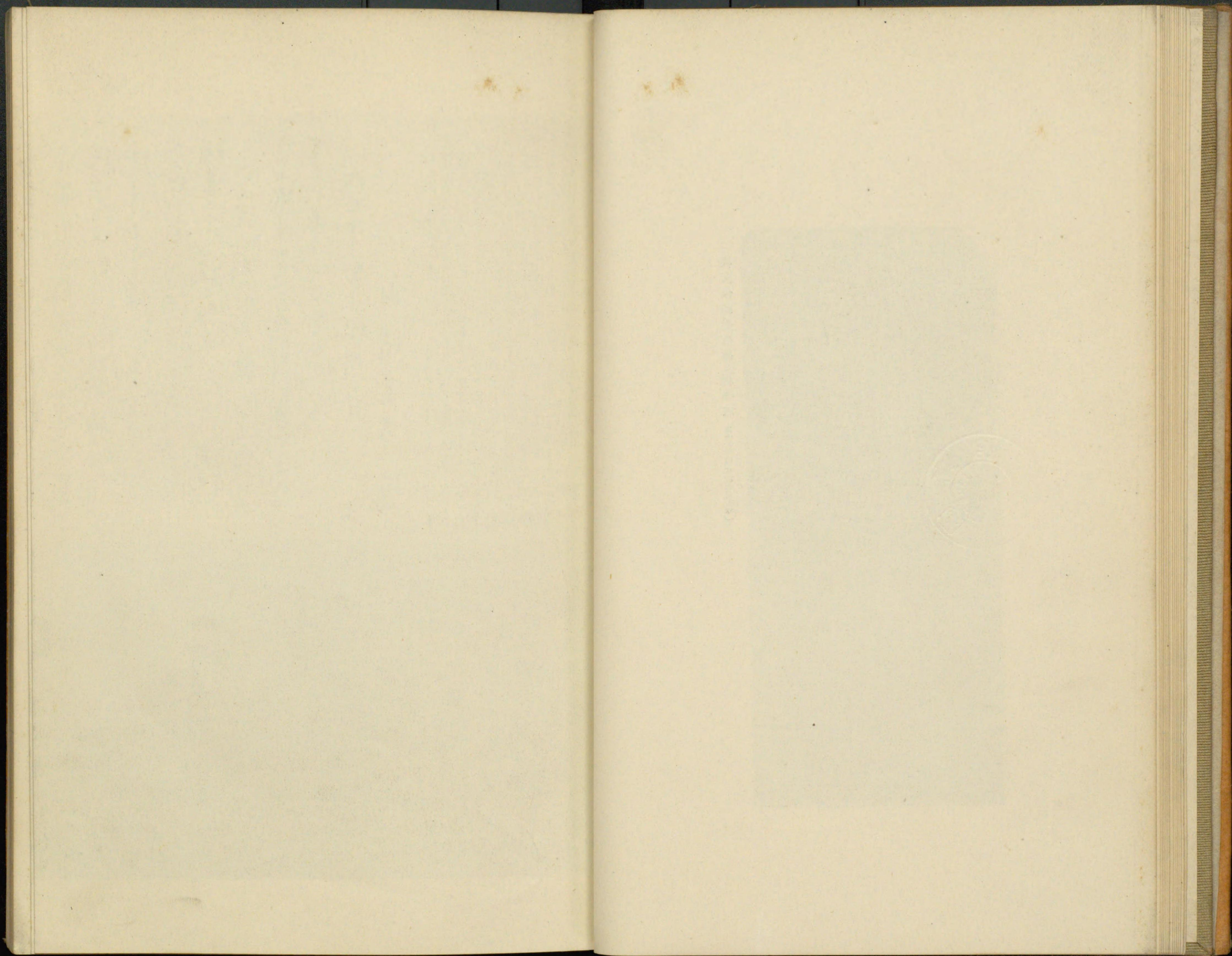
明治三十年四月廿九日  
有珠山下先哲人顯允氏書



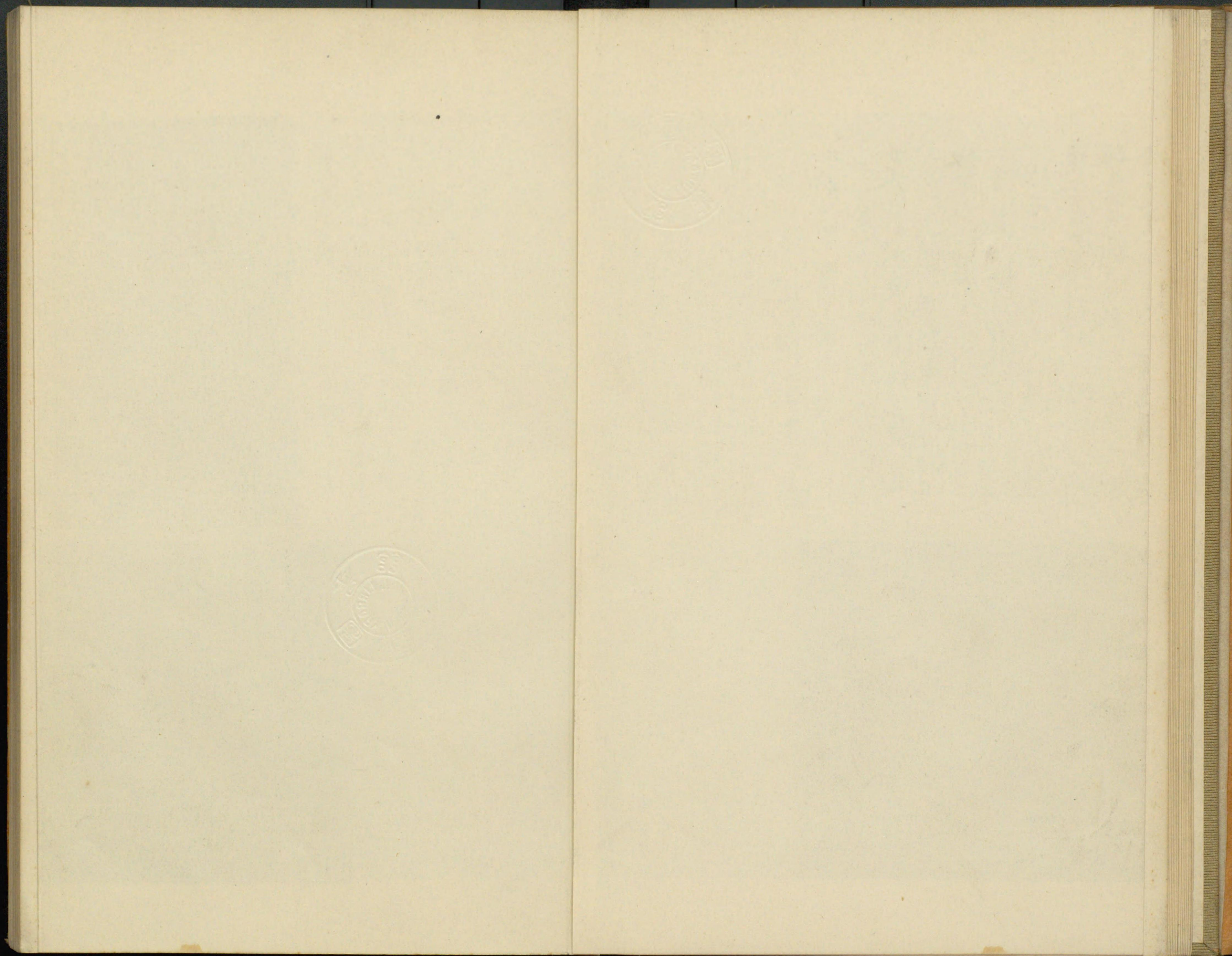
佐藤桃園先生行狀  
先生諱桃園通稱助三郎佐藤氏家世仕於美濃及飛騨等處其先世以文化一井八月生幼而  
穎異從仙臺野田其父自讀文學國語於仙臺其學業最著其父曰可敬也子仙臺先生年甫十其父曰可敬也  
一歲補書院生陳堅君善家道曰法則堂先生父也其學業最著其父曰可敬也子仙臺先生年甫十其父曰可敬也  
先生受命性純幼生誠實下勤也其學業最著其父曰可敬也子仙臺先生年甫十其父曰可敬也  
論以任老藤先生曰其才不足治經因請不仕其國其學業最著其父曰可敬也子仙臺先生年甫十其父曰可敬也  
其助勝之明治中與家長男與家長女四并公其學業最著其父曰可敬也子仙臺先生年甫十其父曰可敬也  
主家財計入其間一其六村其學業最著其父曰可敬也子仙臺先生年甫十其父曰可敬也  
開也其學業最著其父曰可敬也子仙臺先生年甫十其父曰可敬也  
首以死思其學業最著其父曰可敬也子仙臺先生年甫十其父曰可敬也  
是年八月十八先生身人病漸劇直而持人其學業最著其父曰可敬也子仙臺先生年甫十其父曰可敬也  
名勝曰強足跡及三十餘列所刊有題詞而先生行一也其學業最著其父曰可敬也子仙臺先生年甫十其父曰可敬也  
其不能里諸生而後其學業最著其父曰可敬也子仙臺先生年甫十其父曰可敬也  
明治二十五年五月

桃園佐藤先生碑（稻井石 高八尺四寸橫三尺七寸）















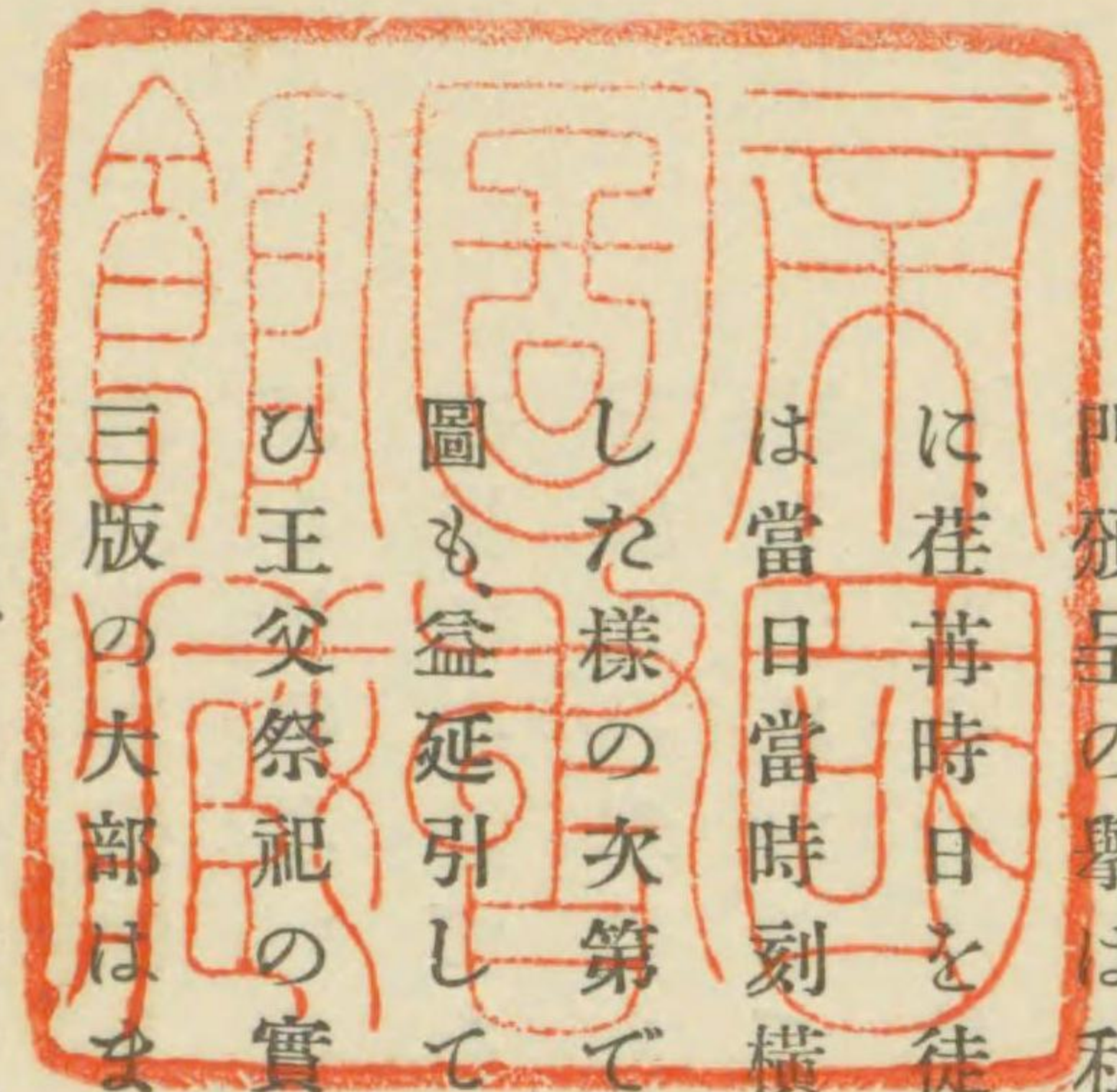




160-947

丙午紀行第四版刊行に就て

私が王父桃園先生の遺著丙午紀行刊行に志した事由の大略は前叙跋文として掲げて置いた通りであります。然るに此書刷成と共に、乃祖の祭祀を行ひ、舊門額岳の擧は、私が私の公私繁勿の餘儀ない事情下に、容易にその機會を得ずは、荏苒時日を徒過して居る内に、思ひきや昨年九月の大震災となり、而かも私は當日當時刻横濱埠頭にあつて、遭難真に九死に一生を得、漸つと三日に歸京した様の次第で、其後心身の繁劇は又言を要さぬ所であつて、従つて如上の企圖も、益延引して今日に迫んで居るのであります。然るところ今秋はどうあつても、ぜひ王父祭祀の實行をせねばならぬことゝもなつて居るのであるが、此書刷製百版の大部はまだ書肆に置いてある内、九月の劫火によつて全部烏有に歸したのであります。それで私は書肆から、先きに各地に送本しある書店に就て、取纏め様と思つて、夫々その方面に照會したのだが、どこの書店でも更に殘部がないのみならず、却つて再刊が出来るならば、これを欲する向きが多いとのこ





とである。私としては當初非賣品としての刊行が、嗚呼がましくも一部公刊を敢てして、王父のこの粗末なる舊著がしかく大方の歓迎をうけるといふことは、誠に想外のことであると同時に、世に温故知新の君子亦多しといふことに就て、實に欽悦を禁じ得ざると共に、わが桃園先生のためにも甚だ光榮に感ぜざるを得ないのであります。

右様の次第であるところから、書肆葉多野君からも、一層のこと、今度は全三卷を綜合一卷のものとして、大方の希望に應ずることにしては如何かといふ相談を受けたのであります。わが桃園先生がこの粗末な舊著が江湖の君子に對して、又多少の役立をするといふことならばと思ふて、その事に決したのであります。そこで葉多野君が申さるゝには、右様にして第四版を刊行することにするにせよ、貴下が御持ちになつて居る別本に、蘇峰三又の兩先生や、その他諸先輩の題跋等も、之をまとめて此の新刊に挿入してはとのことでした。然しこれは私一個に關するものであつて見れば、之を公表するなどの考は初めから全然ないのであるし、又諸先輩の意圖も同じく其所にあるのだから、之等を挿

入しては如何なものであらうと申述べたら、葉多野君の言はるゝには、左様に堅苦しく考へらるゝにも及ぶまい、皆これ桃園先生に就てのことなのだから、一向差支はないではありませんかとて、遂うゝその意に従つて諸先輩の意にも反するだらうが、挿入することゝしたのであります。私は爰にその事情を明かにして、この機會に於て、深くこれを諸先輩に謝することゝ致します。

右様の主意で私が藏書の巻頭又は巻後の白紙に得置いた題言その他を、その順序によつて、夫々本書四刊の巻頭に掲げたことによつて、圖らずもこの第四版の本書が、非常に光彩を發揮するに至つたことは、發行者としての私としては、無上の仕合せと云はねばなりません。其れ故に當初賣品としての刊行書の方に、掲載しなかつた王父の肖像や、記念碑を拓した石摺の縮寫等も一切此第四版には挿入することに致しました。だから非賣品の方へ跋文した主旨も、同じくその二として、爰に共録した方が、讀者が能く私の精神を御諒得下さるに利便と思ふて、敢て掲ぐるの蛇足を附加致しました。

爰に本書第四版の刊行に際して、諸般のゆきさつの概略を叙掲して、大方諸君



子の御如諒を乞ふのであります。

大正十三年梅雨霽れの後の日曜日の午後

東京礫川銀杏書屋樓上に於て

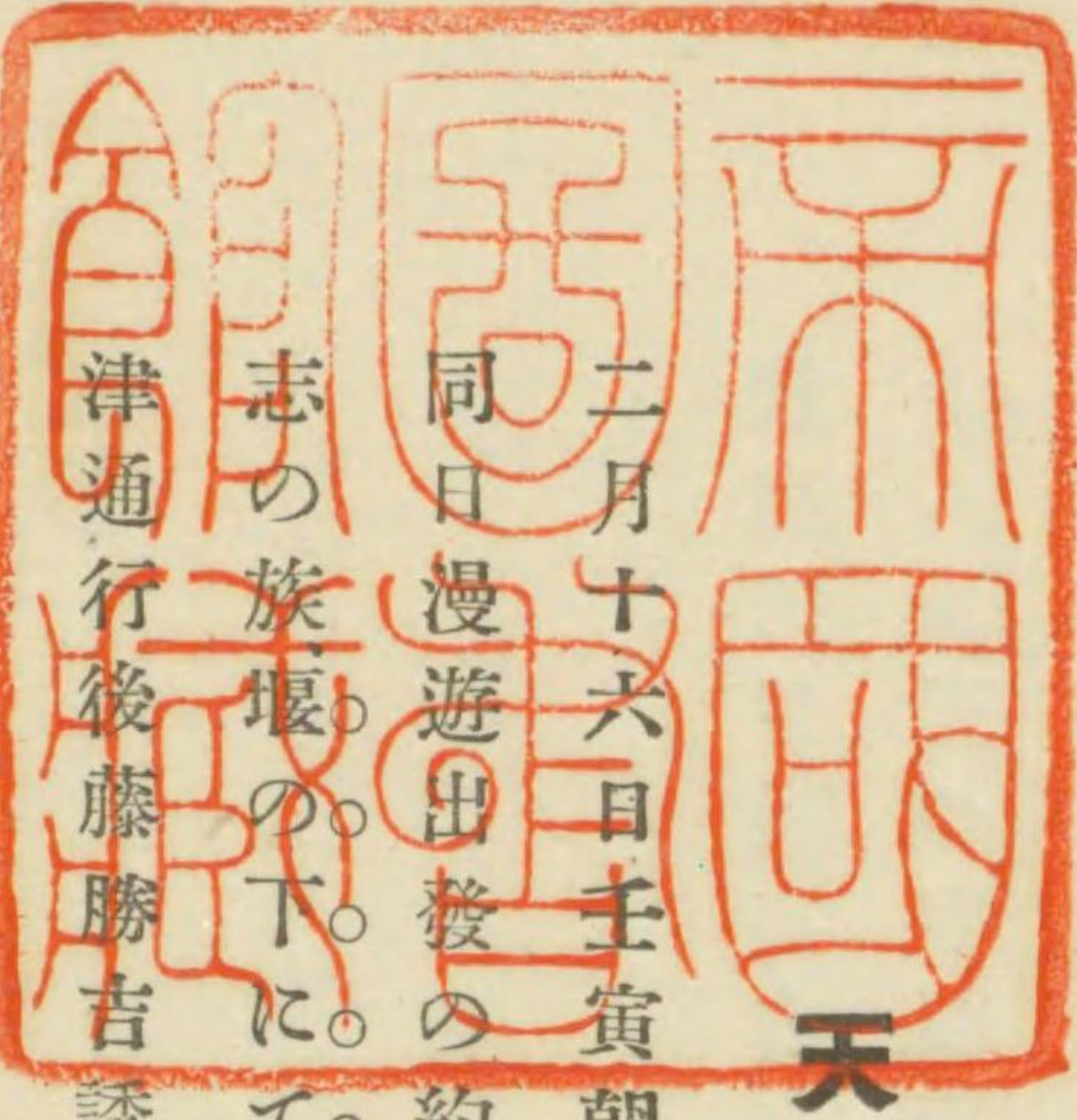
校者再識

丙午紀行

自本藩  
至藝州

陸奥 桃園 佐藤脩亮著

嫡孫 佐藤 密校



二月十六日壬寅朝より折々雪降大風終日不止

同日漫遊出發の約に依て常盤綠陰子今井利定脩亮一同晝九つ時出宿兼て懇

志の旅壇の下にて離杯を採て送別あり(校者曰く當時の光景以て想ふへし)金

津通行後藤勝吉誘引に依て丸森藩中小野右膳宅に一同宿す行程五里。

十七日朝の間烈風四つ頃より少々止

五つ半頃小野氏の邸出立欠入御關所通行里壬生より梁川に至り太田淡齋同  
所に出張に依て尋問す然るに同朝出立の由旅亭にて聞き頗る殘懷にして直



に出立、保原町にかゝり箱崎に至り、此所より下紐の關を遠望して

○思ひ立へたてはあらし旅衣

とけて嬉れしき下ひものせき

箱崎の舟渡しを越て、瀬の上へ着す、當所備中芦森(足守)木下肥州侯領所なり、此夜四つ頃より雨降出て追々大雨、明日の旅行覺束なくて

○小夜更て窓うつ雨を聞もうし

さらてもぬるゝ旅の枕に

旅宿宍戸屋甚吉、行程八里。

十八日五つ半頃雨晴

四つ時少々過ぎ、出宿、下鎌田間も那く鎌田を過て、右に羽黒の社有り、傍の山上に福島侯の祈願所藥王寺といふ寺あり、五十部村といふに至る、道の左に信夫文字摺みちのくの信夫文字摺たれゆゑにみたれそめにしわれならなくに、河原左大臣へ道有て標石を立たり、行程廿六丁なり、前日の雨天にて路次殊の外悪しく再遊を期し實地を踏ます

○問はずしも心の奥はみたれしな

今も其世をしのふもち摺

間もなく福島に達す、板倉采女侯の城下なり、采地三萬石にして繁昌の處なり、當所にて永田子に逢へり、最初會合の約有り、喜悅に堪へたり、根子町を過て若宮に達す、驛中左の方に八幡の社有り、八丁目に至り宿す、旅亭舛舎源五郎、道を取る事五里。

十九日朝の風吹折々雪降

明少々過出立、町出口に天満宮の社あり、傍に豊隆殿としるしたる額かけたる祠あり、信夫安達の境にして橋有り、程なく二本柳なり、町入口に安達山圓福寺といふ寺あり、町より東にうつしか嶽といふ有り、山のかたちふしに似たり

○名に高きするかのふしの俤を

うつしか嶽の姿にそ見る

油井町を過て、福岡に至り八軒に達す、左の方に黒塚あり、僅に岩屋の様なるもの残れるよしなり、二本松に至る



○鬼こもる其黒塚は名のみにて

人のこゝろやすみかなるらん

領主丹羽加州侯采地十萬石、城は右の方に有り、町中には八幡の社あり、程なく正法寺、村杉田に至り、薬師堂へ詣し、本宮に達す、繁昌の町にして、入口に石雲寺と云ふ禪刹あり、間もなく新井田町、此處古戰場にして、人取橋あり、誠の人取橋は是より西に少々入たちて有よし、此處こそは天正のいにしへ

大祖久山君(亘理城主伊達安房守成實三萬石)

貞山君(大守伊達陸奥守正宗)へ御力をあはせ、御心を一にして、風に櫛けつり、雨にかみあらひ給ひて、御かたきをたいらげ給ひし君々臣々の御いさほしの御名、今の世迄もとまりて、世おさまり國さかゆるに、今平坦の道さへ行なやむこと、其おこたりの罪さり所なく覺へたり、高倉川夫より高倉日和田の驛なり、此處に埋骨地藏堂、佐夜姫の像あり、淺香山は日和田町うらにあり、今は田圃となりて名のみ残り、左の方に淺香山あり

○さえかへる春の日數の淺香山

かけさへくもる山の井の水

福原の驛を過ぎ、久保田と云ふ所あり、夫より郡山入口二丁計り、東窪田川に沿ふて、義士伊藤肥前の墓あり、一株の柳の下に碑あり、文字落剝して不詳といへとも、義士の英名末世に朽す

○つかへてし誠の道のいさほしは

朽せて残る石ふみの跡

郡山に宿す、客舎海老屋治右衛門、風雅の志あり、談話數刻に及ひ、書畫帖等を出し、各詩歌を染筆す、行程八里。

二十日天氣吉

明半時出立、小原田秀の山を過ぎ、笹川に至り、十幸内と云處あり、此邊常州府中領なり、程なく越後高田領なり、滑川橋あり、下宿といふを過て、次賀川なり、右の方入口に大職冠鎌足明神の社あり、此處より白川領にして、繁昌の驛なり、町の左に長録寺といふ寺有り、いにしへ二階堂の城址なりといへり、笠石の驛に至る、驛中に常松何かしとて保命酒を商へり、裏に池あり、築山等都て風流を盡せ



り久來石の宿を過ぎ、矢吹に至り、新田、大和久踏瀬、大田川の驛を過ぎ、右の方に、石の地藏あり、むかし仙臺左五平に切られしと云ひ傳へり、小田川を過ぎ、泉田村あり、根田を過ぎ、白川に達す、領主安倍飛州侯采邑十萬石、城は驛の右に有り、繁昌の城下なり、旅宿村上屋傳右衛門、行程九里。

二十一日天氣吉少々風吹

明半時出宿、白川を過て、かはこ村といふ有り、白坂に至り、驛を過て、右脇に境明神の兩社あり、玉津島明神を勸請すといへり、奥州下野の界なり、白川の關此邊をいへり。

○旅衣かすみの袂ゆたかにて

越てもうれし白川の關

寄居高瀬峯岸、杯いふ村々を過て、芦野に至る、此處御旗元芦野健藏殿領所なり、驛の入口右脇に温泉の宮有り、傍に遊行柳の名木、芭蕉翁の碑あり、柳は植繼しと見へて若木なり。

○今も其名にあふむかし契りおきて

しみつにむすふ青柳の糸

驛を過て寺岡村、此邊黒羽領なり、越堀迄の間二十三坂あり、坂より富嶽を望といへり、然れとも此日雲霞朦朧として見る事を得ず、越堀驛右の方那次野に續き、曠々たる野原なり、越堀を過て中川といふあり、川を過て、綿掛の驛に達し宿す、夜に入り大雨、旅宿佐野屋平左衛門、行程八里。

二十二日天氣晴明夜に入少々雪降

明半前出宿、練貫一の澤、深田上の敷杯いふ所を過き、大田原の驛に着す、此處大田原飛州侯領所、祿地一萬三千石、町の左に居館あり、綠陰子永田道を江都に取、利定脩亮日光に至る故、再會を期し、此處にて別れ、是より澤村の驛迄、那次の原にて曠々たる野原なり、近衛天皇久壽二年勅三浦義純上總介廣常狩那須狐化石僧玄翁割其石、甫止其害と原文傍に朱註せり、薄葉と云處を過て、ほうき川と云あり、作山驛川の水源なり、澤村に至り八重田の驛に達す、此邊佐倉なり、夫より高内玉入に至る、驛の右に鶏頂山と云あり、一名高原山と云ふ、頗る高山なり、麓の里民鶏を畜ことを禁す、若畜時は必鳴事なしといへり、然れ共其所謂をし



らす。芦場村を過て、舟生に至る。此處より日光御神領なり。驛を過て結川と云あり。安久津の水源にして、諸材を筏にし江戸に出せり。大渡に至り宿す。旅宿扇屋宇右衛門道を取こと十二里。

二十三日曇晝より稍晴風吹

明六つ少々前出立、芹沼村を過て、今市に至る。此間に臺矢川と云あり。結川に落合へり。四つ時前、鉢石町和泉舍金右衛門の亭に着。案内を乞て參詣す。抑國祖稱徳天皇神護元年僧勝道如始登下野國日光山と原文傍に朱註せり。東照宮御神廟の結構枚舉するに暇あらずといへとも。其先大概を算ふるに、鉢石町を過て左に下乗碑有り。次に朱塗の橋あり。山菅の蛇橋と云へり。平人渉る事を許さず。御宮へ路次の左右諸侯の宿坊綿連たり。程なく右脇御宮様御本坊左の方。將軍家御殿地。是は外構のみにて空地なり。石の大華表。筑前福岡松平筑州侯御寄進。下の石壇を千人舛形と云て檜階なり。左の方に五重の塔。若州小濱酒井侯の御寄附なり。次に仁王門。正面に東照大權現の額あり。

後水尾院の御宸筆なり。左右に國々諸侯御寄進の燈籠數ふるに暇あらず。右の

方に三つの神庫あり。唐銅の鳥居に入。左の方に肥前佐賀鍋島侯御寄進の御手水石。傍に經藏有て一切經を安置す。其外神庫神厩善美を盡せり。次に陽明門。是俗に所謂日暮御門なり。正面の額は後陽成院の御宸筆なり。右の方に在處の南蠻鐵の燈籠は、本藩大守公。元和年中の御寄進なり。朝鮮國より奉納の華絲には、李恒か銘あさやかにささめり。琉球より寄進の梵鐘鐘樓鼓樓は、美麗を盡せり。陽明門の結構極彩色にして、金銀をちりはめ。列仙の像或は龍虎。又は和漢の鳥獸草木を彫刻し。天井は古法眼元信。狩野探幽各雲龍の墨跡なり。表は左右の大臣。裏には風雷の二神を安す。右に神樂堂護摩堂あり。次に唐門なり。是紫檀黒檀等の唐木を以て、色々の樹木を刻す。御本社御拜殿の結構金銀珠玉をちりはめ。凡て善盡し美盡し筆端の及處にあらず。奥の院には常の參詣を許さず。右の方に百八間の廻廊あり。檜廊下と稱す。別當を大樂院といへり。院内頗る廣大なり。御社を下りて道を右に取。右の方傍に相輪塔あり。慈昭大師御建立なり。次に本地日光大權現の御社なり。鳥居の額は正一位日光大權現。嵯峨天皇の御宸筆なり。熊野新宮の社向は、右大將賴朝卿此御山に燈油料を寄附せられしによ



り、白骨を納めし處の堂塔あり、次に

三代將軍大猷院君の御神廟なり、二王門始御拜殿、御内陣九て、結構美麗言語に盡しかたし、然れとも是又常に參詣を許さず、傍に別當あり、龍光院といへり、道を右に取事三四丁にして、御供水あり、甚清淨なり、一丁斗にして、役の行者堂、程なく瀧の尾の社なり、坂を下りて子種權現の祠あり、道を左に取、御本社の後に至れば、臺矢川漲り流れ、右は巖石峨々として、古杉森々たり、飯盛杉の大木、手掛石の大石あり、程なく當山開山の聖道上人の開山堂、次に本宮の社、傍に三重の塔あり、是又大守公の御寄進といへり、日光御神領壹萬三千石、當時奉行河野對馬守殿、櫻中備中守殿、本の道に至り、旅亭に戻り、旅装を束ね、今市に達す、宿の入口右の方に、熊野瀧の尾の社あり、同所に宿す、旅舎加登屋嘉助、行程六里。

○仰くそよ此東路に宮居して

あまねく四方にてらす光りを

二十四日天氣吉

明半頃出宿、森友三つ梨子といふを過て、左に御旅御殿地あり、間なく大津驛な

り、驛を出て五六丁にして、日光御社領宇津宮領との境なり、御神領路傍左右皆並杉にして、從四位下松平右衛門太夫正綱寄進と云碑あり、日光御山中の杉も皆御寄進の植立なるへし、山口、小池、松元、石名田の村々を過て、〇〇〇の驛に至る、宿を過て野澤寺内と云村あり、八つ半頃宇津宮に達す、町中左の方に、當國一の宮日光大明神の社あり、六七年以前廻錄の災有り、此度新に經營せり、御拜殿御本社結構善美を盡せり、右の方に神樂堂あり、社領五千石、國君より御寄附なりといへり、當處にて永田生に再會す、綠陰子は今朝江都に赴しよしを聞けり、驛の右に城有り、甚繁昌の城下にして、二本松白川等の比すへきにあらず、城主戸田山州侯采封七萬石、客舎加登屋利左衛門、行程八里。

二十五日天氣晴明

明半時出立、宇津宮驛を東に下り、奥州水戸街道の別れ道あり、道を水戸通に取、桑島に至る、川有り舟渡しにして、是則ち鬼怒川なり、眞岡の宿に達す、眞岡木綿を産す、此處御勘定領所にして、役所は驛の左に有り、三里程行きて野州常州の境なり、大泉に至る、此處御旗本中根壹岐守殿領處なり、日光より今市邊都て春



寒甚し、此邊に至て梅花半は開き格別春色を催す、田圃は大田原より此邊總てよろしからず、茂手木村を過て雨引に至る、入口に茶店あり、坂路八丁にして左に櫻樹を數た植たり、右に鐘樓仁王門壹丁計り登り本堂なり、正面に額有り、へたてなき誓ひを誰も仰くへし佛の道や雨引の寺今出川公久卿御筆とあり、經營結構を盡せり、左の方に三重の塔あり、傍に別莊有りて庭前の構泉水等甚風流を盡せり、此處より總州結城關宿邊眼下に見眺望の地なり、別當雨引山樂法寺眞言宗なり、當所に宿す、旅亭島田六左衛門當驛笠間領なり、行程十一里半、二十六日終日曇る

明半頃出立道を取る事十丁程にして、大曾根と云所より左に別れ加波山に登る、坂路三十六丁にして絶頂に至り三社あり、第一に新宮別當圓鏡寺、次に中宮別當文珠院、此壹社は牛久領なり、本宮別當正道院新宮本宮の二社は笠間領なり、祭る所の三社彌陀釋迦勢至の三尊なりと云ふ、詣し終て足尾山に至る、坂路上下四十二丁十一面觀世音を祭ると云へり、別當大岩寺寺は各麓に在り、坂を下り上曾根に至る、此處に石の鳥居有りて足尾大明神の額有り、是表口なり道

を左に取坂路十八丁にして峯寺に至る、馬頭觀世音の堂あり高さ四丈程のかけ造りなり、湯袋村に至り筑波山に登る、坂路五十四丁にして半腹より巖石巖々として古木森々たり、頗る幽寂にして雲霞袂より出、群鳥の囀りを脚下に聞、嶮難加波足尾の及處にあらず、絶頂を女體山といふ、十四五丁西にして一峰を男體山と稱し兩社相對して鎮座せり、傍に安置する所の末社數ふるに暇あらず、本社は伊勢皇大神宮を祭れり、社領千五百石別當江戸音羽持院なり、絶頂より四面すれば、東に水戸府中穴戸より木風鹿島銚子に及ひ、南は土浦牛久武の大都房總二州を遠望し、結城下妻關宿より黒髮高原の群岳を望み、北は笠間烏山に至り、殊に駿の富嶽迄廻眸の内に鮮なりといへとも、此日天氣朦朧として眺望心に任せず、可惜の甚敷なり、兩體の間より南へ下る事五十丁にして麓に至り觀音堂あり、入口に仁王門右に鐘樓少々登りて本堂なり、大御堂と唱へ正面に額あり、筑波山此本堂者、征夷大將軍從一位左大臣家光公御再建なりと刻す、左に三重の塔都て堂の經營結構を盡せり、筑波町に宿す、旅亭瀨尾津右衛門、行程十里餘。



○筑波山このもかのものけむりにも

さかゆく民の世をや仰かん

二十七日曉八つ頃より雨降終日不止

明半時前出立筑波町を下り町出口に石の華表有り、日本開闢筑波神社と云ふ額あり、北條の驛に至る此邊より百姓農産を勵むと見えて田圃の手入よろし、尤地性野州よりは格別に宜しくみへたり、小田藤澤の驛を過て水戸通本街道に出たり、眞鍋といへる町有り、二三丁にして土浦城下に達す、諸方よりの舟着にして賑へり、城は町の右に有り、城主土屋采女侯采地九萬八千石、旅宿松屋庄兵衛道を取る事五里。

二十八日曇る八つ頃より晴る

明半時當所より舟を雇出帆、左に牛渡右に木原江戸等の浦々を過、海路七里にして馬渡しといへる處に着船し、陸を行事二十八丁にして阿波大杉の神社へ詣す、社前に町有て石の華表なり、本社拜殿頗る結構を盡せり、正面に大杉殿の額あり、左に神樂堂護摩堂別當天台宗にして龍華山安穩寺といへり、川岸へ戻

り間もなく出帆す、天氣快晴にして吟望に堪たり、此浦を霞の浦といふ

○舟出して波のうらゝかみるめより

霞の浦の名にや立けん

舟を漕事二里計にして浮島といふ處に至り、既に暮に及、天氣又曇俄にもや四面に掩ひ行先を失ひ、壹里程も行しと思ひしに思すも元の浮島に戻り、水主色々心力を盡せとも方角を失ひ、逆も舟を漕事叶はず、辛苦して此夜は浮島に舟を寄せ舟中にて夜を明す。

○磯枕身をうき島にうき寝して

よる屋もなみの哀れをそ添ふ

二十九日曉八つ頃より雨降追々大雨終日不止

夜の明るを待出舟し、舟船一里にして牛堀へ着舟し、風雨にて船を漕事不叶當所に止宿す、旅亭松屋源八風雅を好み、千種様に入門し和歌を嗜む、夜に入談話時を移す。

三月朔日丙辰雨晴八つ過より又雨降



明六つ時少々過出帆し、舟路一里にして潮來イマコに至る、此處舟着にして家數七百軒程繁昌の處なり、二里にして當國一ノ宮蘆島に達す、川岸を大舟戸と云川中に一ノ鳥居あり、陸を行事十丁餘にして町あり、家つつきに左右に御師の居宅あり、二ノ鳥居仁王門御社は拜殿本社美麗を盡さすといへとも、古社にして神さび神威晃々たり、本社の後に神木の杉あり、左に鹿島三社の御甲冑を神庫に納てあり、三四丁左へ入要石高まか原、末なし川等あり

○頼もしなかつたためしの要石

うこかぬ御代の神の誓ひは

御社領二千石大宮司を花輪右衛門と云へり、大舟戸へ戻り、息柄の社を遙拜し津の宮へ着船す、此邊を香取の浦といへり

○漕來にし波わけ衣うちしめる

かとのりの浦の春雨のそら

川岸に鳥居あり、陸地十八丁にして、總州一の宮香取大明神なり、二の鳥居三の華表、次に隨身門左に神樂堂拜殿本社甚よろし、御社領千石餘大宮司香取内膳、

社前の町を香取町と云、西端に觀音堂五重の塔有り、當所に宿す、旅宿手島屋義右衛門、行程海陸九里半。

二日天氣曇

明六つ時出立、佐原に至る、御旗本津田鐵太郎殿領處にして、屋並よろしく甚繁昌の驛なり、岩ヶ崎森戸小杉大和田の村々を過て高岡に至る、井上筑州侯領所采邑壹萬石、右の方に居館あり、深田村を過て、滑河の驛に至る、町入口觀音堂あり、仁王門右に鐘樓本堂天井は狩野○信の雲龍の畫、左右は狩野柳元の筆にして乙類伽陵の畫なり、別當滑河山龍正院といへり、磯邊荒海と云ふに至る田安様御領所なり、成田に達す、町入口に石の鳥居あり、成田町旅店軒をならべ甚賑へり、仁王門裏には廣目毘沙門の二天を安置す、正面に成田山の額有り、安井門主大僧正の筆とあり、大堂大伽藍にして結構を盡せり、鐘樓經藏三重の塔美麗耳目を驚かす、傍に市川團十郎寄附の繪馬堂あり、石の燈籠玉垣池水鉢繪馬等に至る迄江府を始め諸國よりの寄進算ふるに暇あらず、本堂の後へ少々登り、奥の院岩屋あり、左に佛堂右に本地清瀧大權現、妙現を相殿に祭る、常に參詣群



集し信心渴仰あり、別當新勝院といへり、酒々井の驛に至り宿を出て清光寺と云御朱院寺あり、門前に櫻の古樹あり、神君御成の節御尊眸にかゝり、故に枝葉を折取事を禁するの制札を立たり、佐倉の城下に達す、城主堀田備中侯采封十萬石、城は左の方に在り、大手構等も甚麗末にして城下もよろしからず、二本松白河等に及はず、驛を出て駿の富嶽を見る夕陽に映し頗る眺望に堪へたり、碓井を過て、大和田に至る、町入口に印幡沼御普請の跡あり、沼の水を南海へ掘落すの結構なり、地を掘ること低き所一二丈より高き所九丈十丈に及び土地の高低に依て淺深あり、夫役幾萬人と云事をしらす、當驛に宿す、旅亭東屋五兵衛、行程十六里。

○待わひて見てそ驚く富士の根に  
高くそ津もる世々の白雪

三日天氣清明

明六つ時出宿し舟橋の驛に至る、入口に舟橋明神の社あり、大社なり、左は上總街道、右は八幡市川に至る、驛を出て一丁計にして、往昔日本武尊御着岸の湊の

舊跡あり行徳に至る、左海邊にして多く鹽焼を業とす、行徳の宿より舟を雇乗船し、舟路三重にして小網町に着船し、馬喰町二丁目に止宿す、旅舎藤屋嘉平行程六里。

四日天氣清明、處々遊歴す、江都は諸人の知る所なれば記さす。

五日天氣曇る、阿部吉太郎來訪す、同道にて佐藤嘉源治を訪、色々饗應あり、綠蔭子嘉源治の亭に止宿に依て再會し、同晩永田生富澤町に止宿の由にて旅宿へ來訪す。

六日朝より雨降終日止す。

七日天氣吉所々遊歴す。

八日天氣清明、同斷穴戸頼母來訪す、阿部氏も來る。

九日天氣吉遊歴す。

十日終日細雨、穴戸氏阿部氏來訪す、曉七つ頃芝口一丁目より出火四五軒焼失、十一日四つ頃より快晴、八つ半頃雷鳴二三聲雨降間もなく晴。

十二日天氣快晴、所々遊歴、飛鳥山に至る、櫻花一兩日の内に開敷の有様なり。



○咲ぬまはあすも問ひみん飛鳥山

身のをこたりを花にまかせて

同晩阿部氏旅宿へ來り一同漫遊の約をなす。

十三日天氣朝の間曇四つ頃より快晴夜に入雨降所々遊覽。

十四日天氣朝の間曇近々晴

同日五つ時旅裝を束ね出宿利定一同佐藤嘉源治役所に至り色々饗應あり、綠蔭子始利定阿部永田一同出立芝泉岳寺に達す義士の碑あり、廟所に義士の像四五輩を安置す、先年詣せし折は營無之處四五年前に經營すといへり、御殿山に至り品川の驛を過海晏寺に詣す、境内楓數株あり、鮫洲鈴ヶ森を過大森に至る、右脇の茶店に庭前梅數百株ありて東都梅屋敷に比すへし、むきはら細工を産す、此邊左に安房上總を見て頗る絶景なり、六郷の渡しに至る、玉川の下流にして川上を矢口の渡しと云へり、新田明神の社あり、延文三年十月江戸遠江守誘殺新田義興於武州矢口渡崇義興靈新田明神と原文に朱註せり、川崎驛入口より道を左に取、十八丁にして大師河原に至る、伽藍廣大にして結構を盡せり、

別當平間寺眞言宗にして寺頭七千石此邊都て梨子を産す、川崎に戻り宿す、客

舍朝田武右衛門行程六里。

十五日天氣晴明

明半時出立女夫橋八丁なはて市場鶴見橋をわたり新宿かたは村に至り右の方に浦島の古跡あり、淳和天皇勅願所古跡と云標石あり、右の方に碑銘あり、天長二乙卯より元文五康申に至て、九百十四年龍宮に遊事三百四十餘年と有り、文字磨滅して詳ならず、雄略天皇二十二年秋七月丹波水江浦島子遊蓬萊山淳和天皇天長二年歸于丹波古郷と原文に朱註せり、神奈川に達す、驛を過て輕井澤といふあり、道の右脇に富士の人穴あり、然れとも建久二年中仁田忠常の入りし人穴は富士の麓にあるよし、疑ふらくは此所の富士の人穴妄説なるへし、此邊都て左に海面を見眺望の地なり、程ヶ谷の驛に達す、町中より道を左に取、金澤に至る、程ヶ谷より三里にして能見堂といへるあり、山水の奇景神妙にして、金澤八景廻眸の中に鮮なり、故に能見堂の名を得たりと見へたり、堂前に一の庵ありて、三星亭と稱す、輪王寺一品親王近衛大府公紀伊亞相卿御駕をとと



め給ふ所といへり、傍に松一株ありむかし巨勢金岡此地の風光を寫さんとして眞妙心にまかせず筆を投す、故に筆捨松といふよしなり

○うつし繪の筆捨てこそ中々に

書ぬ詠めの名を残しけれ

此所より六浦稱名寺への道あり、標石を立たり、金澤に至る米倉丹後侯の領所にして祿地一萬二千石町を出て右脇に居館あり、間もなく武藏相模の境なり、朝比奈切通しを過て、鎌倉に至る、雪の下入口右脇に右大將頼朝卿の廟あり、治承四年冬十二月造新館鎌倉と原文に朱註せり、間もなく鶴ヶ岡に達す、門前町中央に一段高さ處檀かつうと云て、二位尼公御寄附と云へり、石の華表左右に池あり、右に辨天の祠、左に四つの小島あり、中門を過て正面に神樂堂、左に不動明王、五大尊の乗給ふところ、手前膝を屈めし、事勳功記等に見へたり、今尙かゝの如し、前の石階左の方に承久元年正月ナリ悪禪師公曉實朝將軍を殺せし時、隠れ居りし銀杏の大樹今尙存しあり、側に經藏右に若宮の社、源頼義の建立にして文治三年夏五月康平五年靜女舞樂を奏せし處なり、側に大日堂鐘樓、鐘の銘は正徳四年二月日とあり、後

に柳の古木ありて、蛇柳と稱す、一度枯れしところ、實朝卿千年ふる鶴ヶ岡邊の柳はら青みにけりな春のしるへに」といふ和歌を詠し再ひ葉を生すといへり、境内東の方に當て頼朝卿屋形の跡あり、東御門村西御門村唐門口杯いへる地名も鎌倉繁榮の古跡と見へたり、少々坂を上りて隨臣門正間に八幡宮の額あり、後冷泉院康平六年私八月源頼義草創鶴岡八幡宮と原文に朱註せり、拜殿本社廻廊結構の經營にして神威晃々たり、左に頼朝の社、丸山稻荷の祠あり、別當大場了賢神官大伴左衛門社領三千五百石、社の左より五丁計にして建長寺なり、是鎌倉五山の其一なり、遠門を過て山門に寧一山の墨跡にて建長興國禪寺の額あり、建長五年冬十一月北條時頼建長寺以宋蘭溪爲開山弘安元年寂號大覺禪師と原文に朱註せり、本堂敷？左の方は巖辨天の社あり、寺領五百石三丁計西に尼寺有り、間もなく圓覺寺に至る、弘安五年建圓覺寺以宋祖元爲開基と原文に朱註せり、是亦五山の一なり、山門に圓覺高勝禪寺の額有り、花園院の御宸筆なり、鎌倉五山、建長寺、圓覺寺、壽福寺、淨智寺、淨妙寺と原文に朱註せり、寺領六百五十石各最古刹なり、夫より扇ヶ各に至る、十六井は海藏寺境内にあり、



左に當て、景清岩屋の牢道の傍に、底抜の井、二丁程戻りて尼寺あり、水戸黃門公御屋布にして五百石の御寄附なり、傍に壽福寺と云寺あり、寺内に、實朝卿の御廟あり、北に當て大塔宮土の牢、星月夜の井、巖の不動巡見終て宿す、大澤仙助行程十三里半。

○星月夜霞に曇る影なから

むかしゆかしき鎌倉の山

○仰け猶千とせをよはふ鶴ヶ岡

松ふく風も萬代の聲

十六日天氣曇夜に入雨降

明半頃出立、鶴ヶ岡一の鳥居を過て、道を右に取長谷寺に至るところの路傍右の方に廣徳寺といふ寺有、寺内に大佛あり、長谷觀世音に詣て、七里ヶ濱に至る、路傍に日蓮上人袈裟かけ松あり、鎌倉より十八丁にして七里ヶ濱なり、腰越迄の間、四十二丁の所、汀道六丁壹里の古風に依て、七里ヶ濱といふ、左に稻村ヶ崎といふ所あり、新田義貞龍神に祈誓し波濤を萬里の外にしりそけ、千葉の大軍

を破りし事人の知る處なり、此邊古戰場にして、今も農民刀劍の類を掘出す事ありといへり、腰越に至り道を左に取、文治元年夏五月義經以宗盛父子赴鎌倉、頼朝信景時讒止腰越不容と原文に朱註せり、江の島なり、茶店都て賑ひ庖丁尤よろし、様々の貝細工をも産す、辨才天下ノ宮本社岩窟と三社なり、岩屋の辨天は則奥の院にして、下ノ客より山を下り汀に出乾に當つて巖窟あり、入口よりは奥まで二丁二間左右に諸の神佛を安置し、燭を取て内に入るなり、岩屋を記窟とも稱し、左右屏風の如く、身を潜て中に入誠に舌を卷くの靈場なり、本尊は欽明帝十三年涌出し、天明乙己に至て千二百六十一年、別當金龜山江島寺岩本院山上より望めは左は相の三崎豆のいらこ崎より大島八丈島一眸にして駿の富嶽相の箱根大山まで鮮かに、無双の奇觀たりといへとも雲霞朦朧として眺望心にまかせず

○折しもあれ霞の衣立かさね

入江の島もさたかには見す

夫より藤澤の驛に出る路坊右の方に西行戻しの松あり、藤澤宿中程に時宗の



本山藤澤山清淨光寺山門に登る、靈飛といへる額仁王門に藤澤山の額有り、南堂廣大にして結構なり、右に小栗堂左に觀音堂境内坊舎多し、驛を出一里にして四つ谷と云ふ所に大山への道あり、鳥居に大山石尊大權現の額あり、夫より一ノ宮を過て川有り、田村川といふ舟渡しにして馬入川の水源なり、田村に達し宿す、旅舎松屋與左衛門行程六里半。

十七日雨降四つ頃より大嵐八つ頃雨止

五つ頃出立、伊勢原を過て子安に至る、此所に銅金カラカネの華表ありて大山寺の額を掛たり、是より前不動尊まで坂路三十丁左右皆御師の家軒をならへたり、右に良辨の瀧、良辨杉種々奇石等あり、此處より坂路十八丁にして奥の不動なり、此間別わがて嶮岨にして古木繁茂して朦密なり、山門次に二王門本堂の普請甚よろし、別當雨降山大山寺眞言宗なり本堂の後より石尊大權現への道有り、六月二十七日より七月十七日迄の外參詣を許さず、石尊への社領百五十石、此所より七八丁登り絶頂にして、海面を見渡し武相の二州眼下に鮮なりといへとも雨後陰々として眺望心にまかせず、二十六丁下り、鬘毛に至る、此所京師より參詣

の輩小田原より入るの道路にして是又道路に御師の家有り、當所本大坊に宿す行程五里半。

十八日終日雨降

明少々過出宿、十八丁にして道を右に取田原高山松田を過て川あり、丸木川といへり、關本に達す宿の中程より八丁程左に入道に大權現なり、黒門あり間も無く仁王門、東海法窟の額在り、坂路二十八丁にして社や宮殿の彫物都て結構なりと云しか、過りて天保十一年焼失し當時假宮なり、別當最承寺といへり、塚原へ出、小田原○に至る、驛の右に城有り、天正十八年秀吉陷小田原城と原文に朱註せり、城主大久保加州侯采地十二萬三千石城下甚よろし、中程右の方に虎屋といふ藥店ありて頂透香トウコウと云ふ藥を商へり、ウイロウとて世に名高し、宿を出て左に石橋山の舊跡有り、治承四年頼朝相州石橋山入椶山窟臥木と原文に朱註せり、湯本に至り宿す、箱根七湯の其一なり、旅亭福住九藏道を取事十二里半、十九日雨降晝より止曇る

五つ半頃出宿、すくも澤忍の瀧より石畑○と云所あり、此所より蘆○の湯○への道



あり、此處より別て嶮難にして、猿すへり、銚子の口、絶頂に至ては、四面山又山にして、雲をふむの俤あり、延暦二十一年廢相州足柄路開管根路と原文に朱註せり。

○箱根山雲ふむ峰の雨のそら

袖のしつくも谷川の水

右は名にあふ箱根の湖水にして、箱根權現の鳥居あり、四五丁右に入て、權現の社なり、左右に駒形愛染の社あり、右に鐘塔あり、鐘の銘は永仁二年二月五日、坂の脇に曾我兄弟の祠入口、左脇に釜二つあり、右大將頼朝富士捲狩の釜陣といへり、文永五年十一月十二日と銘あり、別當金剛院東福寺寺領二百石、洛陽御室よりの御朱印寺といへり、右に賽の河原、是より八丁にして御關所なり、小田原大久保侯より勤番なり、箱根の驛に至る、此所相模伊豆の境なり、むかふ坂かた石坂風こし敷、此所晴日には風光よろしといへり、かふと石石割山中茶屋長坂大しくれ三つ谷一ノ山塚原初音ヶ原等を過て河原町なり、此所まで坂路を下る事三里廿八丁にして是より三島なり、入口右脇に當國一ノ宮三島大明神光

仁天皇寶龜十年三島大明神自豫州遷伊豆國と原文に朱註せり、の社あり、石の鳥居を入て池あり、次に仁王門二の鳥居を過て隨臣門、左に三重の塔拜殿本社結構にして頗る大社なり、箱根の坂路上下誠に嶮岨殊に雨後路次至つてあしく疲勞に堪たり、旅宿佐藤善藏行程六里廿八丁。二十日終日雨降

明少々前出立驛より五丁計にして伊豆駿河の境なり、駿河新宿貴瀬川(治承四年源義經自奥州到黃瀬川謁頼朝と原文に朱註せり)東に當て長澤村八幡の社あり、此社内にて頼朝義經對面の舊地なり、石田二た屋此邊を富士隠れといふ地形低くして愛鷹山に遮られて、富士見得す、故に名とす、山王村車返といふを過て沼津に至る、入口に城あり、前に黃瀬川の流れあり、天守巍然として要害よろし、城主水野羽州侯祿地五萬石驛を出て、左を千本松原といふ六代御前(平維盛之男也文治元年六月宥殺刑と原文に朱註せり)の石塔あり、小すは、大すは、松永三本松、大すか此邊都て人家續にして、原に至る左に當て富士足柄の間に横走の關と云あり、むかしの官道なりといへり、足柄山の麓に富士の人穴あるよ



しなり、建久三年六月三日仁田四郎忠常人穴に入し事人口に膾炙す(建仁三年六月和田平太胤長入豆州伊東崎之洞仁田四郎忠常入富士之巖穴と原文に朱註せり)原を過て左の方浮島ヶ原、柏原檜原元吉原四つ谷此間の坂を手兒の呼坂といふ、川井の橋を過て、吉原此邊富士の正面にして、富岳の觀此所にあるといへとも、此日霖雨頻にして麓まで陰々として、更に見る事を得ず遺憾云計りなし(孝靈天皇五年駿州始富士山見同七十二年秦徐福來朝と原朱註せり)

○旅衣待來し富士のはれまなき

すそ野の雨やうき島か原

吉原を過て、右の方久野と云所に淺間の社并に曾我兄弟の禿倉ありて世人曾我八幡と云、今も敵討の者信仰し靈應ありと云傳ふ(建久四年夏五月曾我十郎祐成同五郎時致因復讐殺工藤祐經と原文に朱註せり)福泉寺と云ふ寺に曾我兄弟の石塔あり、苔深く文字落剝して見へす、寺に碑ありて十郎祐成(年二十二歳)を高崇院殿峰崑良雪五郎時致(年二十歳)を鷹岳院殿士山良富とあるよし、連日の雨天にて富士川の涉り覺束なき故實地を踏すといへとも聞及ふ所を記す、新田青島うるい川河原宿元市場へい垣松岡を過て、藤川なり舟渡しにして急流なり

○おしめともよとむ瀬もなきふし川の

流れてはやき月日なりけり

岩淵中の郷三軒屋を過て左を吹上の濱といふ

○雲たちてみるめなきさの浦さひし

あらしは浪を吹上の濱

蒲原に至る、左は海面にして、川田村中村片濱せき澤神澤凡て家つノきにして、由井に達し宿す、旅宿府中屋仙助行程十里餘、

二十一日朝より雨降追々大雨

朝五つ頃出立、蒲原より江尻迄の海邊三穗の入江にして田子の浦といふ、今宿寺尾くら澤油井川を過て薩埵峠なり、路の左脇に望嶽亭といふ茶店あり、此邊都て絶景なり、湧津川といふあり、かち涉りなり、川を過て興津に至る、驛を出て程なく金剛山清見寺なり、山門に東海名區の額あり、左に諸佛堂右に鐘樓、本堂



には興國といふ額あり、朝鮮正使翠屏の書とあり、濟力にして寺領二百五十石、庭前より海面遼々として三穗の松原を眺望す、清見ヶ關(承平三年平將門之亂藤原忠文爲征夷大將向東海道途過駿州清見關時軍監清原滋藤吟杜苟鶴所謂漁舟火影寒燒浪驛路夜過山兩勺忠文感軍中而不忘文事と原文に朱註せり)の跡此邊にして、東海第一の奇觀此地に有といへとも、此日も陰雨冥々として眞景を失ふ事旅中遺恨の第一なり、一首を寺中に殘す

彌生末つかた、清見寺に至り見れば、峯松はみとりの色をまし、浮天の波は雲を汀の傍にて、沖こく舟波ゆく鷗、これか耳目の感ふたつなから此所にありとおほへて

○等閑のみるめやはある清見瀉

浪の關守よしとめすとも

寺僧色々叮嚀にして、裏庭に至りみれば、泉水のかまひ甚風流なり、是よりはた打川横すかいはら川を越て、すゝき島逢染川かつたいか原を過江尻に至る連日の雨天にて、安倍川のわたり不叶由を聞此所に宿す、客舎大竹屋平七道を取

事三里半。

二十二日雨晴曇る

明半頃出宿驛を出て道を左に取、清水の湊に至る、民屋千軒餘にして三穗への舟路なり、五六丁行て觀富山龍華寺といふ日宗の寺あり、庭前に蘇鐵あり、大なる物本の圍み一丈四五尺長サ貳丈枝五十本餘大小數十本あり、庭前より三保富嶽を觀し絶景なり、開山日嚴上人俗稱は里見安房守家臣正木大膳と云、紀州公水戸公の御母公阿滿の方の御甥なり、故に御兩君より種々御寄附ありといへり、有渡の濱の海邊を過て、久能山に至る、入口に下馬札あり、初の御門にて、參詣の輩の姓名出所を糺し、頗る嚴重なり、麓より坂路十五丁計にして、隨臣門なり、後水尾院の御宸筆にして、東照大權現の額有り、次に唐金の鳥居、左に五重の塔、右に鐘樓、神庫、左右に御譜代の諸侯御旗本衆方奉納の燈籠數を盡せり、唐門を過て、御拜殿、御本社、奥の院は御本社、の二丁計後にして、御尊骸を納め奉りし所なり、御普請の美麗は日光に及すといへとも、神君の御眞廟にして、神威頗る嚴重なり、右に藥師堂あり、凡て久能山の坂路巍々として、險しく西に遠江崎



東に伊豆の伊郎崎、正面は所謂遠江灘七十五里の大洋滄々として頗る勝境なり、別當徳恩院御神領三千石、旗元柳原殿守護職にして、役人は小田原侯吉田侯より替るく、勤番あり、大都より、與力八騎同心三十人定番すといへり、此所より三里にして府中に至る、城下甚繁榮にして、紙眞蘆久保茶竹細工等を産す、御城は右の方にあり、御城番小豆原豊後殿五丁程西に當て、當國一ノ宮淺間の社なり、石の大華表仁王門次に隨臣門なり、拜殿の高サ十三間四尺四方、破風二階拜殿左右の廻廊六十四間、御城番の御旗元衆方奉納の繪馬數を盡せり、中央に能舞臺あり、御本社淺間大權現總社拜殿なり、四面花鳥の彫物は信州諏訪館川和四郎の作にして、結構善美を盡せり、左の方に摩利支天の社名古屋大明神の社、何れも極彩色にして甚美麗の經營なり、頂上は奥の院にして、此所いはゆるしつはた山にして、梅樹數株あり、西南に木からしの杜、安倍川に添ふて見ゆ、

○梅さくら花のにしきをたてぬきに

あやちり出るしつはたの山

○花の比なれば美とりの春たにも

その名はつらき木からしの杜

社領二千六百石、別當惣仁院神主新宮將監總社大藏府中の城下を過て、安倍川かちわたりなり、鞠子に達す入口にまりこ川あり、元宿矢の澤を過て、六丁左に連歌師宗長の古跡あり、是より宇津のや峠にして上下十六丁、茶店の側より道を左に取て、葛の細道なり、岡部の宿より十八丁手前鼻取地藏堂の側に出る、宇津の谷の坂路さして嶮難にもあらず

○草枕うさかりふしも跡の夢

けふはうつつの宇津の山こえ

岡部に達し宿す、旅亭龜甲屋久平行程十里。

廿三日曇八つ半頃より雨降

五つ頃出立、宿を出て朝いな川横うち鬼島三つ森八幡燈ヶ淵を過て、左に田中の城見ゆる、藤枝に達す、町中左の方に田中の大手あり、城主本田豊州侯采封四萬石驛を出て瀬戸川あり、かちわたりしなり、志多水上青島三軒屋柄山等を過て、島田の驛なり、大井川過る十七日より川留にて、當所に宿す、旅舎尾張屋嘉三



道を取事四里。

廿四日朝より雨降終日不止

同朝大井川相明通行の段註進有之、本藩御用宿紀國屋藤兵衛前日より色々町  
 嚙にして案内の者旅宿へ遣し明半頃出宿島田河原へ至る、河原表渺々として  
 海道第一の大河、駿遠の境なり、川の流れ二筋にして島田の方へ付なり、流れ水  
 底深くして川涉し不叶、橋を渡せり薩州公の御道行なり、過る十七日よりの川  
 留に付、肥前五島侯大阪御番の御旗元衆其他諸國の商人風騷の雅客都て島田  
 へ逗留の輩一同に河原一面に押出、金谷の驛には十八日より薩州侯御止宿其  
 他諸家の藩中往來の旅舎是亦一同出張故川の兩岸雲霞の如く先道具弓鐵砲  
 鎗長刀馬駕籠長持面々の荷印思ひ／＼に押立各前後を争川渡しの人足は賃  
 錢の多少をいとみ誠に古今の見物なり、校者曰大井川川留の當時の光景宛と  
 して目前に見るか如し、大井川の川留とはよくさゝしことなるも、今茲に祖君  
 のまのあたりの逢事を記述しつゝ、當時を偲ひて其の實景眞に眼前に髣髴た  
 り、晝頃川を渡り、金谷の驛に至り宿を出てすはの原に至る、此所に矢の根鍛冶

ありて製す、菊川に達す、此地は往昔中納言宗行、卿昔、南陽縣之菊水、下流を汲て  
 齡を延、今東海道の菊川西岸に宿して命を亡すと宿の障子に書置しといへり、  
 小夜の中山に至る、無間の鐘は一里半程右の山中に埋ありといへり、夜泣石  
 は十二三丁程下り坂中にあり

○わけのほる小夜の中山くるしきも

こえて名残のおしまれそする

日坂に達し、驛を出て、路傍左に譽田八幡の社有り、娘の田舅の畑鹽井川原を過  
 て、右に大燈籠權現への鳥居あり、加茂すは村鳴瀧を過て、掛川の城下に至る、町  
 中右に大手あり、城主太田備中侯采邑五萬石當所に宿す、旅宿池田屋長右衛門  
 行程四里半。

廿五日終日雨降

明半頃、出宿、城下を出十四五丁にして右に秋葉山への道あり、唐金の鳥居あり、  
 此所にて綠陰子阿部氏は直に京師へ赴きしに依て再會を期し暇をなして相  
 別れ、森町に至る屋並よろしき驛なり、三倉一の瀬に至る、此間かちわたりの川



多くして四十八瀬といへり、大田川の一河なれとも屈曲して如此し、下流は袋井見附の間に落るなり、子ならやすを過て氣田川といふ舟渡しあり、戌亥に達す、此邊山々に松を植立、諸材を澤山に出すと見へたり、田畠至て不足にして山谷隅々まで畑にして、土地はよろしからず、又茶を産す、坂下に至り宿す、森町より坂路にして嶮難なり、旅宿高木屋安兵衛行程十二里半。

廿六日雨八ツ頃より止曇る

五ツ頃出立、秋葉山への坂路五丁にして、唐金の鳥居あり、金明嶺の額あり、二十九丁にして又華表あり、最勝關の額あり、四十七丁にして同鳥居に、護國嶺の額あり、五十丁にして仁王門秋葉寺の額を掛けたり、此間坂路左右古杉繁茂して甚隈密なり、右に經塔石階一丁斗にして、正面は觀世音なり、拜殿に淨聖殿と云額あり、右脇は正一位秋葉大權現の社なり、拜殿本社彫物等凡て善美を盡し結構なり、右に萬燈堂左は大登山秋葉寺曹洞宗にして寺中頗る廣大なり、火災鎮防の神にして諸國より信心渴仰の寄進等夥し、左に道を取坂路三十丁程下り、鳥居に金樹林の額あり、是京師より參詣の道なり、麓に下り斗倉を過大川に至る川あり、天龍川の水源にして舟涉りなり、石打熊神澤、大平に至る、此所遠江參河の境にして、此邊迄専ら杉を植立諸材を多く出せり、巢山に達し宿す、旅舎柏屋彦右衛門行程十二里。

廿七日天氣吉

明半時出立、大野の宿を過て川あり、かち渡りなり、坂路三十丁程にして行者越といふ大難所あり、二丁の間膝を抱て登るか如し、麓より五十丁にして鳳來寺なり、本地峰の薬師左右に十二天童子を安置せり、前に鐘樓後に本宮左に三重の塔、右に大師堂元三堂夫より石階を登り、東照宮御靈屋にして左右に御譜代の諸坂寄進の燈籠あり、天臺眞言兩派にして、煙巖山勝岳院鳳來寺々々内二十二坊兩學寮凡て二十四坊なり、寺領千五百石、坂路九丁下り二王門あり、麓を角谷と云て宿屋多し、瀧川の舟渡しを越て、新城に至る、菅沼織部正殿領所にして祿地八千石繁昌の町なり、然れとも田圃至て惡し、二里斗にして道を左に取、豐川稻荷明神へ詣す、折節開扉にして近郡より老若袖をつらねて群集す、正面に觀音堂左に稻荷の社なり、神樂堂諸佛堂結構



の經營にして別當妙嚴寺、夫より道を右に取一里斗にして路傍右に當國一の宮、砥鹿大明神の鳥居あり、此邊古の官道にして本野ヶ原といへり、御曲に達し宿す、旅亭銀杏屋伊左衛門道を取事十三里半。

廿八日天氣晴明

明六ツ少々過出宿、赤坂に至驛を出て中柴法藏寺を過て左に神君御身隱山といふあり、藤川に達す、宿を過て西尾領なり、間もなく大岡紀伊侯領所にして右に居館あり、采地一萬石大平村、左に小豆坂古戰場にして三振太刀の高名、此所なり、天文十一年今川義元與織田信秀激戰於小豆坂、小豆坂七本鎗織田信秀織田造酒取下方左近岡田助右衛門佐々木隼人、佐々孫助中野又兵衛と原文に朱註せり、岡崎に達す、天文十一年冬十二月大神君御誕生參州岡崎城と原文に朱註せり、城主本多上總侯采地五萬石、城下甚繁榮す、城は左の方にして要害甚よろし、城下を出て矢矧の橋、長さ貳百八間にして海道第一の橋なり、東矢矧に至り、右の方に淨瑠璃姫の古墳あり、西矢はき大濱を過て池鯉鮒より八丁程手前にして街道より五丁程右に入一堆の小高き岳に古杉六七株ありて八橋の古

跡なり、八橋山、無量木といへり、本堂に紀州公の御筆通儒閣の額あり、八橋をわたせし古跡は本堂右の方の側にあり、今に橋柱什物にして寺中に存せり、業平塚とて寺の後にあり、業平者阿保親王第五子正三位中納言行平之弟也、幼時號曼陀羅丸、體貌閑麗稱天下美男、好和歌耽女色、感情性放縱、元慶四年爲左近衛中將、業平引女子函、他婦不遑數時、人戲呼謂陰陽神、今歲卒五十八と原文に朱註せり

○むらさきのゆかりの色も夏艸の

むかし戀しき八橋の跡

池鯉鮒に至る、此處刈屋領なり、驛を出て右に池鯉鮒明神の社、左に御茶屋と稱して御殿地あり、あいつま川八丁なはて今岡今川を過て境川橋あり、是參河尾州の境なり、西北に當てあなふ村といふ有り、毎年六月朔日新米を國君へ獻すといへり、落合村右に仙人塚といふあり、間もなく桶狭間の古戰場にして街道より一丁斗左に今川義元主從戰死の場所あり、古杉の下に標石ありて今川上總介義元戰死の所と鐫す、明和八年十二月千代倉氏の建る所なり、永祿三年夏



五月今川義元於桶狭間與信長相戰義元敗軍討死と原文に朱註せり少し上に松井八郎戰死の所と云碑あり其外士隊將戰死の所と刻るところの碑五ヶ所にあり有松に至る家ことにしぼりを商へり鳴海へも出せり有松しぼり是なり鳴海に達し驛を出て田畑橋左右に鷺津丸根等の砦の跡あり笠寺へと人家續にして山崎橋といふあり八丁なはてを過て宮に至り宿す旅宿大津屋利吉行程十三里。

廿九日天氣晴明

明半時時出宿宮驛築出町といふ所に載斷橋と云あり欄干に銘あり天正十八年六月十八日小田原陣中に於て堀尾金助十八歳にて討死し慈母哀憐の餘り追福のために架す三十三年供養の規式法名等あり此地は桑名へ七里の渡し又佐屋廻りの上下咽喉の所にして甚賑へり左に道を取り熱田の社にして白鳳十四年夏六月天武天皇病納艸薙劔於熱田社と原文に朱註せり大華表あり拜殿本社廻廊美麗は盡さすといへとも頗る大社にして神威をます社領千石神主千秋出雲守社内より左へ出て名古屋に至る此處にも大鳥居あり町つつきにして名古屋城下に入右に東御門跡あり寺内廣大にして堂塔普請都て結構を盡せり左に西門跡寺内普請東に劣りし事比すへきにあらず若宮八幡の社あり御域は右の方に巍然として藩中士以上常に次肩衣にて登城すとみへたり城下の繁華大都の風にして商家甚よろし大橋を涉り廓を出て左に一丁斗入粟手の社の社あり

○祈れともあはての杜の夕たすき

かけて甲斐なき身をいかにせん

十四五丁南上の中村に豊臣秀吉公生誕の跡ありて大閣山常泉寺とて日宗の寺あり今に八月十八日豊太閤薨御の法筵ありて群集すといへり又加藤清正出生の所も此南隣村下の中村なり氏神八幡宮を今に於て裔様より修補あるとなり淺野蜂須賀其外尾州出生の古跡多きよしなり道を取事二里斗にして鳳凰山甚目寺といふ寺あり觀音を安置す此所より三里にして津島に達す是又繁榮の所にして一ノ鳥居樓門を過て拜殿本社左右に彌五郎殿森居殿神樂堂繪馬堂無殘經營にして結構は盡さすといへとも是亦神威晃々たり社領千



三百石別當實相院大宮司堀田右馬太夫其外神職數多あり尾州に入田圃大にひらけ悉く豊饒の地なり然れとも山林不足にして采薪の患有りとみへたり佐屋に至り此所より乗船し船路三里にして中程に尾張勢州の境あり長嶋は左の方に當れり桑名に達し宿す族亭京舎小平行程海陸十一里。

晦日天氣曇晝より雨降追々大雨夜八つ頃雷聲あり

明六つ少々過出立左に城あり海面に築出し要害甚よろし城主松平越中侯采封十一萬三千石都鄙附會の城下にして頗る賑へり左に春日の社あり城下を出て町屋川おふけ朝け川はつかいそ川を過て四日市なり此所又繁昌の驛にして町中に四日市川あり日永を過て追分に達す京師伊勢路の道ありて皇大神宮の鳥居并に標石を立たり道を伊勢路に取かはら田鈴鹿川高岡を過て神邊に達す領主本田伊豫侯祿地壹萬五千石玉垣を過て白子に至る右に白子の觀音安産の靈驗ありといへり境内に不斷櫻あり上野に達し中井磯山小川を過て右に高田御門跡への道あり中山町屋を過て津に至る江戸橋とふせい川あり城主藤堂泉州侯采地三十二萬石餘城下よろしく殊に長し旅亭瓢箪屋惣

助道を取事十三里。

四月朔日丙戌天氣四つ頃より快晴

○旅のそら霞の衣ぬきかへて

けふ卯の花のしらかさねせん

明六つ少々過出宿たるみ高茶屋を過て雲津に至る此所に雲出川あり舟渡しなり月本に達す右に大和奈良への別れ道にして標石を立たり少し行て左にわすれ井あり六軒に至る此所にも大和への別れ道あり松坂に達す紀州公御領處にして繁昌の驛なり櫛田に至る此所に櫛田川あり舟渡しなり明星か茶屋新茶屋を過て小俣に達す驛中にて縁陰子阿部に逢へり山田より戻り京師に赴くの由を云へり離杯を採て互に無事を約し相別れ宮川の舟渡しを過て山田雄略天皇二十二年秋九月遷祠豐受大明神於勢州度會郡山田原と原文に朱註せり)に至り外宮豐受大神宮の御社や左右の末社かそふるに暇あらず夫より山田町を過左右神宮軒をならへたり町を過て合の山古市の遊里にして晝夜三絃の音絶る事なし此間五十丁にして宇治に達す五十鈴川あり橋を宇



治橋といへり、伊勢路に至り六軒松坂の邊より殊に賑はしく、都鄙遠近の隔なく老幼男女貴となく賤となく詣人ひきもきらす、山田宇治の市居賑はしく實に天下豊饒の地なる事推して知るへし、井面神主の亭に着止宿す、行程十里餘、二日五ツ頃より雷聲雨降晝より快晴

同日朝飯後井面神官より案内を出し、内宮皇太神宮へ詣す、(垂仁天皇二十五年春三月建) 天照太神社於勢州始立齋宮と原文に朱註せり、御社白木造にして結構を盡さすといへとも清淨にして、内外兩宮共に廿一年目毎に新に經營すといへり、本邦開闢宗廟の御神にして敬畏渴仰に堪へり

○汲てしれ御裳川のなかれまで

内外の神にもれぬ惠みを

左右風の宮雨の宮を始末社數ふるに暇あらず、御神領三千石山田奉行太田志摩守殿、夫より天の岩戸へ詣す、誠の岩戸は磯邊といへる所に、して、此所は、後年擬へ、移せしよしなり、井面の亭へ戻る。

三日風吹

五ツ半時亭より案内を出し朝熊に詣す、宇治橋の東詰より道を右に取坂路五十丁斗にして六軒茶屋といふ有り、是より廿二丁にして朝熊ヶ嶽なり、門前にて萬金丹を製しひさけり、二王門に朝熊岳の額あり、本堂を摩尼殿といへり、本尊虚空藏菩薩左右に諸佛堂三丁右に入て奥の院なり、付螭殿の額あり、傍に富士見臺といふありて晴日には富士山を望といへり、別當勝峯山金剛寺社領百石六軒茶屋へ戻り、此所より道を右に取二見の浦に、至る、海面二ツの岩頭へ、注連をかけ晴天富士を觀し、世に普く圖するか如し、殊に駿遠參尾の浦々を遠望し、頗る佳景なり

○伊勢の海ひろふかひある玉くしけ

ふたみの浦のあかぬみるめは

是より行程百丁にして宇治へ戻る。

四日天氣晴明

明半時太神宮へ詣し亭へ戻り、正神主從三位荒木田政親對面あり、滯留中饗應頗る叮嚀にして、懇懃に堪たり、五つ過暇を乞旅装を束ねて出立、宮川迄案内を



出し同所茶店にて饗應あり、松坂に至り宿す中屋彦八道を取事六里半。

五日天氣晴明

明少々前出宿、月本迄戻り標石の所より道を左に取、雲津川をわたり久居に至る、領主藤堂佐渡侯采邑五萬三千石城下甚寂寥として邊鄙なり、三軒より長野に至る是より坂路五十丁の峙なり、併さして嶮難にあらず、絶頂伊勢伊賀の境なり、平松を過て、山田に至り宿す、客舎綿屋半平行程十二里半。

六日天氣晴明

明半時出立、上野に達す、城は町の左にして藤堂侯の持城なり、伊勢路奈良東海道附會の地にして賑へり、鴻(？)ヶ原に至る川有舟渡しなり、十五丁斗にして伊賀山城の境なり、大河原を過て、笠置に達す、此處より乗船し木津川を下り三里にして木津に着船す、此間に山城大和の境あり、此邊多分牛にて荷物を運送す、木津より五十丁にして奈良に着す、町入口に佐保川あり、旅宿蒟蒻屋庄五郎道を取事川陸十一里半。

七日曇八ツ半頃より雨降

五ツ頃案内を乞て旅亭を出て奈良を見物す、所謂奈良舊都にして神社佛閣名跡枚擧するに暇あらずといへとも巡見する所の大概先東大寺に至る、聖武帝の御創造にして大門あり、景清門ともいへり、次に二王門夫より大佛堂なり、百間四方の廻廊にして世に知る所の大伽藍にして大佛坐像長々五丈三尺(聖武天皇神龜十六年冬十一月大佛始成同十七年秋八月遷奈良と原文に朱註せり)東の方に大鐘あり重サ四萬八千九百斤、二月堂には觀音を安置す、傍に良辨と云あり、三月堂四月堂各佛像を安す、脇に若狹の井といふあり毎年二月十二日(校者註陰曆にて云へり)の夜一夜に若狹の國より水涌出すといへり、然れとも其いはれをしらす、北に當て三つ倉といふあり、蘭麝待(天正二年春三月信長奏往奈良東大寺截蘭奢待、明治十年二月九日聖上奈良大佛殿博覽場へ臨幸天覽後木戸内閣顧問香川宮内大臣を勅使トシテ正倉院ニアル蘭麝待を貳寸斗リ切斷持返ラセラル一名黃熟香織田信長壹寸八分切リシ後切リタルコトナカリシナリと原文に朱註せり)を收め置といへり、其外寶藏數多あり、南に八幡の社あり、東大寺凡寺領千百石左に手向山三笠山あり、麓に三條小鍛冶宗近の



末裔なりとて刀劍を製し商へり、三丁程南にして春日の社なり、山中鹿多く境内寄進する所の燈籠舉てかそへかたし、社は結構を盡さすといへとも神さひて神威を増すとほへたり、僅南に若宮八幡の社あり、神主神塚出雲守社領二萬五千石、四五丁西にして氷室の宮あり、夫より興福寺に達す、(元明天皇和銅三年右大臣不比等建興福寺於奈良、敏達天皇八年冬十月新羅貢釋迦今在興福寺と原文に朱註せり)一乗院御門主にして境内頗る廣大なり、本堂七堂伽藍廻椽?にして南大門の礎のみ残り、前に扇の芝と云ありて、毎年薪能興行あり、右の方に五重の塔、藥師堂花松と云名木有り、門前に猿澤の池、衣かけ柳、采女の宮、八重櫻等相並んで有り、境内左の方に西國札所南圓堂あり、(弘仁四年春正月藤原朝臣冬嗣建南都興福寺南圓堂祈藤氏榮と原文に朱註せり)雲井坂は巽の方にあり、奈良奉行池田志摩守殿、客舎へ戻り、旅装を束ね八ッ頃出立、道を右に取右の方に、聖武帝の陵あり、法華寺に至る、此所古の皇居の跡といへり、寺領三百石、西大寺に至る、是亦寺領三百石、夫より八丁程西にして、菅原天神へ詣す、是菅公御生誕の舊跡にして、村名も菅原といへり、別當喜善寺招提寺に至る、道の

傍に風來の池と云あり、招提寺に至る甚古刹にして、寺領三百石、五丁程にして西の京に達す、右に五重の塔あり、七堂伽藍、享祿の兵燹に依て焼失すといへり、是又寺領三百石、道を南に取郡山に至る、城主松平甲州侯采地十五萬石、右の方に城有り、城下甚賑へり、當所に宿す、旅亭花内屋忠兵衛道を取事三里。

八日天氣朝の間曇追々快晴

明半頃出宿、小泉に至る、領主片桐市正侯祿地一萬二千石、法隆寺に達す、聖德太子の御創造にして大伽藍なり、境内坊舎多く、左に五重の塔、峯の藥師堂、寺領千石、夫より道を右に取龍田明神へ詣す、(天武天皇白鳳四年龍田社於大和國勸請と原文に朱註せり)二丁程西の方龍田川兩岸に紅葉あり

○龍田山千入の秋やいかならん

そめし錦の折にあひなは

三室山は一丁斗南なり、龍田川の舟渡し越へて片岡山達摩寺(推古天皇二十一年皇太子見異人於和州片岡是達摩化身なりと原文に朱註せり)に至り、二里斗南にして石光寺といふあり、中將姫光仁天皇寶龜六年夏四月中將姫寂和州禪



林寺俗日當摩寺と原文に朱註せり)の古跡にして庭前に糸掛櫻染井後に二上ヶ嶽あり、俗に染井寺といへり、當摩に達す、是又境内廣大なり、本堂の右の方に中將姫織殿間、左に大師手習の間、蓮糸の蔓陀羅額は後奈良院の勅額にして其外什物數品あり、寺領三百石、折節開扉にして貴賤群集す、道を東に取高田八木を過て右の方に安滿のかく山あり、三輪に至る一の鳥居を過て左右旅舎茶店多し、坂を少々登り左に二本の杉右に立賓僧都衣掛の杉、しるしの杉何れも古杉なり、三輪明神へ詣す(崇神天皇十年改大和大神爲大三輪大神と原文に朱註せり)

○祈るその人の心のすくなれと

立るしるしの三輪の神杉

社領百石社内より左に道を取、追分に至り宿す、郡山より此邊綿木綿を産す、生産を勵むとみへて民屋都てよろし、客舎角屋重治郎行程十里。

九日天氣吉

同日明半頃出立、長谷寺(元正天皇養老五年造長谷觀音尊像聖武天皇神龜四年

建長谷寺と原文に朱註せり)へ詣す、樓門より本堂迄坂路廊下續にして、左右坊舎連續せり、本堂廣大にして左に五重の塔あり、眞言宗にして寺領五百石

○法の華世々にひらけし駒瀨山

聲も色ある曉のかね

追分へ戻り、櫻井を過て安倍文珠へ至り、夫より飛鳥明神へ詣す、境内に伊勢内外兩宮を祭り置けり、鳥居の向に飛鳥川あり、橋寺に至る、聖德太子御誕生の舊跡といへり、岡寺(天智天皇二年依勅願建大和岡寺と原文に朱註せり)に詣て此所より坂路五十丁にして、多武峯に至る、大職冠鎌、足公の御廟所に、して、頗る結構を盡せり、左の方に十三重の塔あり、境内坊宇數多あり、別當天台宗にして竹林坊大僧正社領三千石、道を左に取瀧の畑に至る西南の山上に高取の城みゆる、ちまた、上市を過て吉野川なり、舟渡りして、左の方に妹山あり、脊山は紀州にいて遙隔つといへり、一里にして吉野に至る、(正慶二年天皇遁洛建都吉野稱南朝と原文に朱註せり)坂路八丁左右皆櫻樹にして所謂一目千本の梢なり、皆青葉にして散残りし、一木の花あり



○いかにしておくれ來し身に残りけん

むへ心ある花の一本

○若葉にも思ひやらるゝ吉野山

千本の花のさかりなるころ

唐金の大鳥居ありて、發心門の額は大師の御筆二王門を過て藏王權現の社なり、正面に金峯山寺の額あり、別當を吉水院といへり、義經此山に潜行ありしに依て什物數々あり、(文治元年頼朝捕義經之妾靜於和州吉野山と原文に朱註せり)社領二千三百十六石東の方に子守勝手の社 後醍醐天皇の陵あり、奥の院は山上大峯にして此所より六里坂路誠に嶮難なるよし、修驗者萬行の靈場にして常の詣人も淨衣を着し群參引もさらす、當所に宿す、旅亭辰己屋長右衛門行程十里。

十日天氣吉四ツ頃より雨降

明半頃出宿、道を左に取五六丁にして路傍左の方に南朝の忠臣村上彦四郎義光の墓井に碑銘あり、六丁に至り川わたしを過く長田(？)鶴野にかゝり五條に達す、當驛甚賑へり夫より待乳峠に至る右に又た法眼筆捨山といふあり、さして景地にあらす、此所和州紀伊の境なり、橋本に至る、路傍に護國寺といふ寺あり、庭前に行基の植たまふと云松あり、枝葉枯槁すといへとも古松なり、豊太閤高野山御參詣の節御旅殿なりといへり、紀の川の舟涉しを過て、かむろ、河根を越神谷に至る此所茶店へ北室院より案内を出し置響應あり、夫より高野山へ登山す、坂路五十丁にして山中松檜繁茂して朦密なり、其内不動坂とて傍に不動堂あり、八丁許の間甚嶮難なり、坂路を過て絶頂五十丁四面平坦なり、入口に女人堂といふ有りて此所より女人入ることを禁す、十八丁にして本藩宿坊北室院へ着す行程十三里。

十一日終日雨降不止

同朝役僧案内にて院内本堂へ詣し、左の方別殿にて本藩大守公御代々御位牌を拜す、嵯峨天皇弘仁七年夏六月釋空海開紀州高野山承和二年春三月空海寂高野山天安元年冬十月贈大僧正昌泰二十二年諡弘法大師と原文に朱註せり、飯後案内を出し奥の院へ詣す、宿坊より二十丁なり一ノ橋といふを過て、左に



毒水玉川あり、わすれてもの古歌を石に刻し立たり、慶長十六年建る所なり、中の橋左の路傍に汗かきの地藏姿見の井あり、右に蛇柳といふあり、左に織田信長筒井順慶等の五輪、左に明智光秀の石塔中央より臺石迄裂たり、是主君を殺逆の罪に依て如此といへり、無明の橋を過て本堂なり、後の方奥の院の堂は大寺御入定の處なり、左に骨堂右に藥師堂木食堂本堂より一ノ橋の橋迄の間左右に禁裏世々の帝王親王家の五輪將軍家御年廻の御塔婆并に國々諸侯の五輪石堂靈屋連綿と立並ひたり、別當誓願寺山内諸侯の坊宇算ひつくしかたし、寺領二萬千石七堂伽藍は去々年焼失すといへり、誠に高野山は兩部曼荼の靈場大師禪定の勝地にして宗々の祖師諸山の高德歩みを運ひ代々の天子世々の將軍信を寄せたまひ、大名高家百姓町人貴となく賤となく菩提をとむらひ、繁昌を祈るの靈地なり

○高野山其曉の松風に

うき世の夢もさめやしつらん

北室院へ戻る、饗應願の町摩を盡せり、晝頃旅装を束ね暇を告げて出立、神谷迄

戻り此所より道を左に取九度山、西町に至る二丁斗南の方に二尊院といふ有り、大師御母公の御廟所なり、山上に丹生七社大明神の社あり、西町に戻り宿す、客舎森屋勘助道を取事四里。

十二日天氣快晴

五ツ頃同所より舟を雇ひ乗船し、吉野川の下流紀の川を下り藤崎といふ處あり、川中に岩石の孤島元として頗る山川の奇景なり

○むらさきのゆかりなくとも藤崎の

名に流れなん山と川とに

右に粉川寺根來寺を觀し、岩手を過八軒といへる所に着船す、紀州より大阪への街道にして商客多く賑へり、此所より道を右に取日前の社へ詣す、經營は結構ならずといへとも當國一ノ宮にして古社なり、紀三井寺に至る寺中頗る廣大にして本堂より和歌の浦淡路島他島沖の島神島眼下に眺望し甚勝地なり、麓大門先より十八丁の處小舟にて涉り和歌の浦に至り玉津島へ詣す、拜殿は和歌の浦水面へ掛け造りしにて本社は少しく放れて山腰にあり、則此山を脊



山といふよしなり、左に龜遊岩鶴立石あり、後に三の石橋ありて是を三斷橋といへり、傍に芦邊屋朝日屋の茶店あり、左は琴の浦布引の松あり、龍燈の松ともいへり、名草山は紀三井寺の方に當てあり、五丁程西に東照宮の御宮あり、石の鳥居を過て朱塗の橋石階を登り、樓門次に唐門左に藥師堂右に三重の塔、御拜殿御本社鐘樓繪馬堂残りなき經營にして結構を盡せり、左の方に相並んで天満宮の社あり、是亦美麗を飾れり、別當雲蓋院山下の海邊をかたを浪といへり、妙見の社望海樓の古跡妹脊山養珠寺此邊を芦邊といへり、海邊の松は麗色滄々として和歌浦の風光旅中の眞妙此地にあり、聖武天皇神龜元年冬十月勸請衣通姫於紀州海部郡崇玉津島明神是月天皇至玉津島頓宮留十有餘日時帝以弱浦景堪遊覽名更明光浦と原文に朱註せり

○わすれめやみるめうれしき和歌の浦

みかく玉藻の數ならぬ身も

○言の葉のさかえをわかの浦浪に

かけてそ仰ふく玉津島姫

當所に宿す、旅亭米屋榮藏行程川陸十里。

十三日朝より細雨

五つ頃出立、若山街道右の路傍に五百羅漢寺、後の山上に秋葉の社程なく右の方に愛宕の社圓珠寺といふ寺あり、城下入口道の左右に根上りの松あり、根上り高低ありといへとも七八尺より一丈餘に至り根を顯せり、御城は右の方にして天守石垣巍巍然たり、城下民屋揃ひ諸士の第宅甚よろし、藩中平生登城次肩衣にて名古屋に同じ、宜敷國禁を守るとみへて士以下町人に至ては、婦女子といへとも絹布を着せしもの嘗てみへす、凡若山領南海にして後は山暖國にして田野ひらけ豊饒の地なり、岡の社に詣し、中の島に至り時鳥の松を一見し、北の町といへる所に本願寺あり、二丁程西にして鷺の森なり、夫より紀の川を舟にてわたり右の方梶取村又淨土宗本山總持寺といふあり、松江に至る、此邊多く耳麿を作る磯の浦に至る、此處の茶店にて糸切餅といふを鬻けり、加太に達し淡島明神へ詣し、四國へ渡海故當所に宿す、柳屋善藏行程四里。

十四日雨晴風吹



五つ頃出船、右は大阪への海路なり、右に友ヶ島一名苦ヶ島、淡路島、須本(洲本)、由良を右に見、又島を左に取、紀州崎を遠望し、鳴戸を右にして阿州撫養に着船す、此日風波あらく船中甚心よからず、旅舎坂田屋惣助海路十三里。

十五日天氣晴明

明半頃出宿、早崎といふ所を過て、矢武村に羅漢寺あり、莊嚴院地藏寺といへり、寺内より道を左に取、山坂にして一本松越といふ峠あり、阿波讃岐の境にして、此處迄徳島侯領所なり、引田を右に取、山中村といふに至る、路傍に森權平明神といふ社あり、長曾我部盛親と接戦の節討死の士を祀るといへり、白鳥の社へ詣す、社領三百三十石にして大社なり、町田に達し宿す、津田屋幸八行程十一里。

十六日天氣晴明

明間もなく出立、街道より道を右に取、鶴羽より津田に至る、此の間平坦の松原にして、左に入幡の社は海面にして往還よろし、津田を過てぶとう峠、海士峠といふ有り、夫より志渡寺に至る、本尊觀世音房前公玉取の舊跡なり、右の方二

丁程隔て志渡寺奥の院にして、園子尼の屋布跡といふ標石あり、十丁程行て右に矢クリ山、聖天への道あり、夫より卒禮に達す、路傍左の方に古松六七株あり、て佐藤、繼信墓と石に鐫し立てり、討死の所は三丁斗北にして射落しの畑とて今にありて二百有餘年を過て、至徳元年四月五日奥州の信空とて繼信氏族の僧歌を讀〇〇在りし事等世傳にあり、傍に馬の塚あり、太夫、黒馬埋處と刻す、薄墨と名付て義經の寵愛ありし名馬、繼信に給はり、繼信討死の日、此馬に乗りしかは、死後に弔の爲志渡寺へ送りしか、食を斷此所に來舌を喰て死せしとなん、石碑は寛文二十年に建る所なり、元暦元年より今年弘化三年に至て六百六十二年なり、五丁程北に惣門の跡とて畑の中にするしの門を立置今に至り、國君より修造有といへり、十丁程にして壇の浦なり、洲崎堂といふ寺あり、門前に源平古戰場と石に刻し立たり、此所渚に祈り岩駒立石、杯いふあり、那須與市扇的を射し所なり、(文治元年春二月義經焚屋島皇居、那須宗高射扇的同三月平家諸族悉沒西海と原文に朱註せり)此所より屋島への路傍右の方に安徳帝の宮間もなく一堆の高き所、古松の本に次信の碑銘あり、是又寛永二十年に建る所な



り坂路十三丁登り山上屋島寺にして、南面山といへり、境内より四五丁西の方に獅子靈巖と云所あり、此所より讃岐の島島、高松の城下、城は平城にして海面に築出し麓は鹽濱にして鹽屋相並ひ奇景いふ斗なし、本門より十三丁坂路を下り高松街道に出北村といふ所より道を左に取二里にして佛生山に至る、法然寺と云り、折節本尊開扉にして老若貴賤引きもさらす群集す、惣門を過て二の門次に本堂なり、左に三佛堂と云あり二王門を過て二尊堂山上は菩薩堂なり、寺領三百三十石淨土宗にして寺内廣大なり、高松侯菩提所といへり、門前の方に藤大明神チキリの社あり、當所に宿す、旅亭車屋治右衛門行程十三里。

十七日天氣晴明

明六つ間もなく出立、道を右に取平岡十三塚を過て瀧の宮に至る、驛中右の方に天満宮の社又程なく祇園の社あり、此邊より象頭山みゆる、山の形象の伏したる如く頭の方山腰金毘羅宮鎮座なり、象頭山の名あり、金比羅に至り麓町中頃に一の鳥居あり、町は甚繁華にして坂を登り、二王門傍に清少納言の塚ありて碑銘を立てたり、坂を登り右の方に別當あり、金剛山松尾寺といへり、左に神

馬堂少少登り右に二重の塔諸佛堂、左に薬師堂ありて、總彫物にして結構善美を盡し金堂とも稱へり、少々坂を登り金毘羅宮本社なり、左に經堂觀音堂繪馬堂あり、坂路左右麓より本社迄石の玉垣にして數百の燈籠何れも諸國津々浦々より寄進なり、參詣は都鄙遠境といはす、袖をつらねて群集する事伊勢兩宮に亞くへし、社領三百三十石麓に下り道を左に取右の方に飯野山と云あり、讃岐小富士ともいふ、善通寺に至る勅願所にして寺内廣大なり、庭前南の方二丁斗に西行久の松とて古松あり、菴をむすへり、夫より彌谷に至る路傍に西行芋畑の古跡あり、彌谷は大師御入學の靈場にして劔五山彌谷寺といへり、本堂の傍より道を取麓に下り十丁餘にして屏風ヶ浦に達す、大師御生誕の所にして大師堂有り、寺を白峯寺といへり、甚景地なり、多度津に至る路傍左の方に八幡の社あり、多度津は廻船着岸の地にして甚繁華なり、領主京極壹岐侯祿地一萬石、中津川を過て丸龜に至る、是又繁昌の城下にして城は山城にして右の方にあり、城主京極長州侯采邑五萬千五百石、阿波讃岐は山中樹木至て不足にして、大抵小松のみなり、用水極めて不自由にみへたり、兩國共に堤(?)多し、丸龜



客舎柏屋團治道を取事十四里。

十八日天氣晴明

同日日の出を待て出帆し、左は讃岐阿波の島山、右に備前の玉島備後の鞆安ぶと其外島々を眺望し殊に天氣朗に浪靜にして頗る吟望に堪たり、田島といへる所に舟をよせしはらく汐あいを待、此所備後福山阿倍勢州侯の御領所なり夜に入少々雨降。

○たくひなみなきたる朝に舟出して

みるめもあかぬ沖つしま山

十九日雨止朝の間七つ頃より雨降

同日早天に出帆す、順風にして右に備後の尾の道三原を見、藝州の忠の海竹原長濱左にカマカリ杯の浦々を過、七つ頃より雨降風立、舟子とも辛苦してアガといへる所に舟をよせ泊す。

○風あらみしはしと思ふ夢たにも

渡の枕にむすふ間そなき

廿日天氣快晴

同朝夕時よろしからず、出帆見合す内ひろの瀧を見物す、此所より五十丁斗北の山間にある瀧は餘り高からず八九丈の間二段に落る岩にせかれて幾度となくあやなすさま殆奇景なり

○せきかへる岩間の波の花とちり

玉とくたくるひろの瀧つせ

晝過より出帆し、音戸と云所に至る、此所にいへ地續きの山なり、か平相國山谷を切ひらき宮島への通路自由なさいめい處といへり、清盛の墓なりとて海へ築出し一株の松並又五輪あり此浦民家甚よろし夜九つ半頃廣島へ着船し泊す、丸龜より宮島へ海上五十里すくに同所へ着船順路といへとも廣島への便船渡海せしゆへ同所へ船をよせ泊す。

廿一日天氣吉七つ頃より雨降

同四つ時出帆、風よろしからず、宮島へ舟路五里七つ頃着船し宮島旅宿中屋新助。



丙午紀行 前編 (天) 終

丙午紀行

自藝州  
至本藩

陸奥 桃園 佐藤脩亮著

嫡孫 佐藤 密校

地

四月廿二日曇入つ頃より快晴  
五つ頃案内を乞亭を出て嚴島へ詣す、當所は所謂扶桑三景の一にして、四方の  
文雅騷人舌を捲くの勝地なり、先其大概をしるに、社前海面に大鳥居あり、楠の  
全木にして高さ五丈八尺六寸圍り二丈三尺笠木十二間、表に嚴島大明神裏に  
伊都岐島大明神の額あり、各竪九尺横五尺、後奈良院の勅額なり、左右の廻廊  
百八間にして百八の金燈籠海面左右にも百八の石燈籠あり、潮満れば水面に  
映い佳景いふ斗なし、左の廻廊に客人の神社傍に鏡池俊寛卒都婆石等あり、治



承元年六月成經及康賴僧俊寛流于鬼界島と原文に朱註せり右の廻廊に天満宮大黒天能舞臺あり廻廊の天井に後藤基次の筆にて日城巡國後藤又兵衛と落書あり正面本社にして狩野古法眼元信の三十六歌仙の額をはしめ諸名家の額面數ふるに違あらず左に豊太閤御造營の大夏正面に釋迦如來を安置す世に千疊敷といふ是なり傍に大内義隆寄進の五重の塔あり一切經堂二つ是亦同寄進なり湯立堂書肆には徵明の書にて名山藏とあり左右の縣は肥州雪山の筆なり平判官康賴寄進の石燈籠後に本地十一觀世音右に大元の社神主棚守將監別當二ヶ寺眞言宗にして瀧山大聖院龜居山大願寺と云庭前に古松あり小松三位重盛の植し所といへり治承三年秋八月薨年四十三と原文に朱註せり社領千石後の方高山は奥の院にして彌山といへり麓より坂路十八丁にして嶮岨なり左の路傍懺悔地藏祈不動火防不動瀧の宮白糸の瀧あり十五丁にして二王門絶頂より僅下に大日堂あり福島正則造營といへり後の方にヒセン石舟石奇石數々あり目洗の薬師と云あり傍の石に凹なる處ありて潮の満干有といへり嘗るに味鹹し愛宕の飛杉正月六日龍燈ありといへり絶頂

を少々下り岩屋の不動毘沙門堂あり堂内の額は亞聖鄒國公六十代武士武撰と有り清朝より奉納といへり傍に鐘あり治承元年丁酉二月日施主右大將平宗盛と鐫す三丁程下り奥の院にして虚空藏を安置す庭前に錫杖の梅時雨の櫻杯いふあり左の方に一山の守護三鬼神の社あり元の道に出麓に下り旅亭へ戻り八つ頃旅装を束ね便船を得て廣島に赴く海上左の方に地の御前と云社あり嚴島御旅處にして毎年六月十七日の祭禮には神輿船中管絃にて本社へ渡御ありと云へり廿日市の浦を過汐時あしく廣島へ着船成りかたぐ海路四里井の口と云處に着船し草津の驛を過廣島の城下に達す府に入橋二つありと川といへり城は右の方にあり城下甚よろし然れとも國用乏しく札通用にいて價定らず士民難澁して甚不景氣なり此邊より端午の幟を當時より立たり城主松平藝州侯采地四十二萬六千石客舎伊豫屋惣八行程海陸五里

宮島にて時鳥を聞て

○うき旅の身のなくさめの時鳥

島めぐりして初音をそなく



廿三日天氣晴朗

明半時出宿、城下を出て、左の方に饒津明神の社あり、先主淺野長政を祀ると云へり、十一二年前新に經營のよしにて普請結構を盡せり、別當明聖院右の方僅隔て、東照宮の御宮石の華表唐門廻廊御拜殿御本社彩色にして美麗なり、別當長尾山松園院夫より舟越と云處に至る、二丁斗東に可兒才藏の墓あり、標石を立たり、貝田に至る此所街道より道を右に取三ッ石に赴く、矢野熊野内の海を過行程十一里にして三ッ口に達す、舟宿千藏屋幸助當所より舟を雇ひ暮少々過出船す、此間安藝備後の境なり、三原を左に取海路十三里翌朝明半頃尾の道に達す、商船着岸の津にして繁昌の地なり、行程海陸二十四里。

廿四日天氣晴朗

同朝直に旅装を束ね出立、町内左脇に入幡の社あり、町を出て三丁程行、左に西國寺といふ眞言宗の大寺あり、程なく藝州領福山領の境にして、双方共に番所あり、今津の驛を過て右に福山の城見ゆる、阿部勢州侯采地十萬石の城下なり、大渡り川を過て石州と福山への別れ道あり、今泉に至り神苗の宿を経て備後

備中の境なり、此所にも福山の番所あり、上出郡を過七日市に至り宿す、吉屋榮

吉行程十二里。

廿五日天氣吉

明半時出立、町出口に川有り、此所一橋様御領所にして左の方に陣屋あり、今市を過て矢掛に至る、入口に矢かけ川あり、此宿にてゆべしを産す極めて上品なり、驛を出て街道より三丁斗左の方に吉備公の墳あり、標石を立たり、間もなく岡田伊東播州侯の陣屋あり、河邊に達す、町出口に川あり、舟渡しなり、三軒屋に至る、左の方に國分寺といふ禪刹ありて境内に五重の塔あり、藝州より備後備中山林樹木なく小松のみなり、備中別て土地悪し鐵を國産す、板倉に達し三丁斗右の方に當國一ノ宮備津の宮あり、隨臣門唐門廻廊本社拜殿頗る結構なる大社なり、神宮三日市長門守社前の町を宮の内と云ふ、市居甚よろし、當所に宿す、花屋さぬ行程十三里。

廿六日終日雨降

明半時出宿、間もなく備中備前の境なり、道の左に備前一の宮吉備津の宮あり



隨分大社なり、二里にして岡山の城下に達す、城主松本豫州侯采封三十一萬五千石商船往復あり、又伯州へ川舟上下あり、城下市塵よろしく賑ひ藩士の第宅よろしく田圃ひらけ城下出口右の方に羅漢寺あり、矢かけに至り八市を経て川有り舟渡しにしてよしの川といへり、右の方に長船村あり、刀劍を製す、助定の末葉の第宅尤よろしく見へたり、かゝとを過て員べに至る此處、家毎に陶器を産す、備前燒是なり、片上に達し宿す、旅宿惠美須屋林治行程九里。

廿七日天氣快晴

明半時出宿、三ツ石に至る、驛を出て坂あり、時に備前播磨の境あり、梨子ヶ原といふ處を過て有年に達す、當所に赤松信濃守則資三男本郷掃部介直頼居す、有年の古城の跡有り、赤穂への別れ道あり、此所より三里といへり、驛の出口に有年川舟渡しなり、此處より二里北赤松の庄河野村に赤松圓心の墓あり、標石を立たり、鶴龜といふ處に至る、左右に鶴屋龜屋の茶店ありて、赤穂名産花燒鹽同所花岳寺より出る處の淺野義士等墨迹の石摺を商へり、藝州より此邊農家牛を畜へり、片島に達す、客舎正條屋彌三七行程九里半。

廿八日天氣曇七ツ半頃より雨降

明半頃出宿、町の出口に川有り、正條川舟渡しなり、左の方に龍野の城見ゆる、五萬石脇坂淡州侯の城下なり、あそ川を越かるとまい、鶴小田を過て笹葉峠とて小坂あり、青山川を越てのをに至る、此處に因州への別れ道あり、姫路に達す、天正九年秀吉築播州姫路城と原文に朱註せり、城主酒井雅樂侯采封十五萬石城は左の方天守巍然として市井軒をならへ、般盛なり、草細工を産す、書寫山への道あり、出口に市川といふ舟渡しあり、御着に至る小寺藤兵衛政職の居城に遺跡あり、福井を過豆崎に至り往還より道を右に取り十八丁にして曾根天神に至る、延喜元年菅公筑紫へ謫遷の時當處伊保の湊へ、御船を寄せ給ひ、社より一丁西、檜笠の岡にて四方の絶勝眺望有り、故此宮を檜笠の天神とも申奉る、天正六年豊臣秀吉公の再營といへり、樓門の額は曼珠院二品親王の御筆、攝社多く、神殿巽の方に曾根の松といふ名木あり、菅公御息憩の時松の苗を御手つから植給ひ、我に罪なくは榮ひよと祈り給ふに繁茂し、しかも蟠龍の形あり、枝幹は土を去る事僅かに三四尺象獸地をかけるか如し、南北に流れ東西にわたり株



のめぐり一丈八尺高さ一丈、良の方より坤の間二十間斗り乾より巽の間十二間餘、其餘四方へたれて偃蓋の如し、又風雪の爲に折れ裂ん事を恐れ、枝柱を以て支ふ事百を以て數ふ、磷磷釘頭の如く翠綠鬱鬱として神の靈木たりしか、惜哉近年枯れてみき斗残れり、魚崎といふ處より道を左に取二十丁斗にして石の寶殿に詣す、靜岩屋とも稱し、石殿を以て神體とす、大さ一丈八尺高さ二丈六尺すへて社壇の形に造りたるを横に倒したるなり、一石以て作りなしたるは元より此地は近國の名物龍山石を産する山にして、寶殿も一個五十餘丈の石山を中を切抜き造りたるなり、上になりたる所には自ら土留りて松を生ず、めぐり窪くして水溜り池の如し、大已貴少彦命一夜に御造營と社傳にあり、山上より播磨瀧兵庫大阪を遠望し奇絶の景地なり、巽の方の石山南面に觀濤處の三字の大字石あり、東都永井氏の書する處にして、大字を能くす、一字五尺有餘、荒井川の舟涉しを越て、高砂に達す、西の方入口に圓光大師の御遺品寶瓶山十輪寺と云寺あり、貴僧門の額は智恩院宮一品峯法親王の御染筆なり、境内には水主九十六人溺死の石塔婆中央に寶篋院塔あり、高麗佛と稱す、元祿元年豊

臣秀吉公朝鮮征伐の時高砂より水主百人を召さる、歸陣の時百人の内九十六人溺死す、よつて永世高砂の地子を御免役有て今に然り、高砂の社へ詣す、石の鳥居樓門正面に能舞臺右の方に相。生。の。松。あり、枝葉鬱蒼として繁茂せり

○ちりうせぬ例しや幾世深みとり

名も高砂の松の行末

森森たる社地にして、社前海面にして則高砂の浦是なり、當所は諸國の通商大場の湊となりて大厦つらなり、上に川あり下に海あり、萬船の出入に便りよく遠く交易し本邦出群の名所なり、當所に宿す、旅亭つり屋伊七郎行程九里。

廿九日雨降晝より晴

明半頃出立、八丁斗にして尾上に至る、祠るところ住吉の神なり、社の巽に相。生。の。松。あり、天正の頃秀吉公三木城別所小三郎を責る時、小三郎救を毛利輝元に乞ふ、即ち藝州より小早川隆景、吉川元春兩大將にて總軍一萬餘騎兵船二百餘艘、明石郡魚住の浦に着、糧を三木城へ運送の後詰の爲に總軍今の尾高砂の邊りに陣を取てかの松を伐りて篝とす、夫より枯て慶長九年池田輝政の沙汰と



して粘根の上に神祠を移し、左方に鐘樓を建後年又祠をに乾移し粘根は神職の家に納てあり、偕鐘は甚異形にして古物典雅の珍器なり、是全く漢製にして日本の物にはあらざるよしなり、龍頭の傍に竹管の形を付たり、上に乳子イボなく、天人樹木座其餘樟様等の鑄付は刀田山鶴林寺の古鏡浪花長柄霍滿寺の古鐘三所共に等しく、其大きさも似たりといへり、其内長柄の鐘は長門國の堤普請の節掘得て即長門國厚東郡守部郷松江山普濟禪寺永和五年己未仲呂日と鑿付て其寺にかけたりしか、故有りて浪華に送る處にして裾に大平十年の年號をぼろに見得たり、是西晋二世惠帝の時にして、日本寛政九年迄千三百九十九年又後銘の日本の永和五年よりは四百餘年なり、されは尾上刀田山の二鐘と共に千四五百年來の物とみへたるよしなり、近邊林の田の中に石船と云ふあり、俗にあまのつり舟といへり、其故をしらす、むかしの石棺の蓋なるへしといへり、六七丁西北に當りて刀田山鶴林寺聖靈院といふあり、七堂伽藍にして寺内廣大なり、聖德太子御創草にして太子二歳同十六歳同四十二歳三影合體の尊像にして即太子の御頂の髪を植させ給ふ故に世植髮の太子と稱し奉るよしなり、創建の本願は武藏國大目身人部春則なり、一千有餘年の星霜を経ぬれば破壊して天正元年當國三木城主別所長治の再營なりといへり、夫より別府に至る處の路傍安田村といふに天滿宮あり、濱の宮とも稱す、別府に達す、本社住吉神社なり、神前右の方に手枕の松と云あり、是又名木なり、めぐり一丈餘南北四十歩、東西三十歩程幹は猛虎の蹲踞の如く枝葉は臥龍に似たり、西島を過て長濱と云處に出つ、是官道なり、金ヶ崎、大久保の驛を過て明石に達す、入口に明石川有り、城主松平兵部侯采地八萬石、城は左の方にあり、南は市店海邊に至り、商船交易多く、町は繁昌すといへとも要害始諸士の第宅よろしからず、城下中程より左に入忠度の塚並に腕塚あり、三丁計り北にして柿本人麿社なり、歌道の聖神と崇めてかしくも代々の帝王奉幣並に御製を賜はる、享保年中正一位贈號あり、聖武天皇天平元年柿本人丸卒スト人丸石見國ノ人も不審其父祖以和歌著於世卒スル時詠和歌云イハミノヤタカツノヤマノコノマヨリウキヨノツキヲミハテツルカナと原文に朱註せり、社前に盲杖の櫻人丸の碑銘あり、盲杖の櫻はむかし筑紫より來りし盲人の詠みしとて



○ほのくくと誠あかしの浦ならば

我にも見せよ人丸の塚

碑は寛文四年庚申明石城主松平日向守信之建と有り、文は林道春是を撰書す、別當を月照寺と云へり、明石の浦は郡中海邊の總名にして社前よりの眺望甚よろし、舞子の濱に至る、此邊砂殊に白く、數千株の松に高低なく梢を等ふして、丈に不過、枝幹屈曲おのつから見處あり、前に淡路横はり、後に小山すゝき一奇觀の勝地なり、舞子焼とて風流の陶器を産す、たるみ村に達す、入口左の方に仲哀天皇の御陵あり、三ノ谷二ノ谷を過て界川といふあり、播摩攝津の境にして一の谷なり、元暦元年春二月範頼義經陷一ノ谷城と原文に朱註せり、街道左脇に太夫敦盛の五輪あり、鐵拐ヶ峯ひよ鳥越安徳帝行宮古跡一の半腹に鐘かけ松と云ふあり、須磨寺に至る、上野山祥福寺といへり、眞言宗なり、二王門義經馬盟の額あり、左の方に若木の櫻、寺前に神功皇后釣竿の竹、義經の腰掛松傍に鐘あり、銘は攝州矢田郡丹生山田庄平野安養寺鐘とあり、鐵拐ヶ峰に掛て有りしを源豫州軍終て後士卒に命し、此所にかけしといへり、故に一の谷に鐘かけ

の松あり、一丁程西に敦盛の首塚あり、寺の什物は敦盛赤旗、名號母衣結の名號、何れも黒谷法然上人の書なり、熊谷直實書する處の敦盛の鐘像、敦盛幼少の手跡の和歌、同鑑同高麗笛、漢竹の笛ともいへり、青葉笛辨慶若木櫻の制札等なり、客殿右の方に敦盛の木像を安置す、六百年前の侏目前にして感慨に堪たり、境内より紀の浦々淡路島播摩瀉を觀し、頗る寂條たり

○淋しさのいつかはあれと須磨の浦

もしほのけむり松の夕風

夫より東須磨と云處に松風村雨の墓あり、程なく路傍左の方に並松二丁計民家を経て長田明神の社あり、鳥居の額は小野道風の筆、境内石燈籠は村上天皇の御寄附なりといへり、甚大社なり、兵庫に達す、大阪と西國と商船都會の地にして繁榮此所に集る、當所に宿す、旅店柵屋長左衛門道を取事十一里。

五月朔日乙卯天氣吉

明半頃出立兵庫西南を築島と云又一各經ヶ島ともいへり、平相國清盛の石塔あり、右に時宗一遍上人示寂の舊跡眞光寺といふ大寺あり、建治元年一遍始開



時宗遍字知真河野七郎通廣之二男也と原文に註せり築島來迎寺是亦大寺なり抑相國入道治承四年六月清盛遷京於攝州福原養和元年春閏二月清盛薨年六十四葬攝州經島と原文に朱註せり此地を築く事民の煩ひをかへりみず、唯威に誇る悪行には似たれとも、末代天下の至寶にして島々入江田地となり、人家も増殖し諸國に船の煩ひなく、交易盛に行る、其功誠善行なりといへり、儲此津を築く條は、攝津和田の崎難波の浦は往還の海門天下運送の要津なり、平家の威勢萬國に及ふといへとも東國の八平氏關奥の夷賊に恐れあり、こゝを以て清盛かた／＼思ひめぐらし京畿をはなれ、要害の府城をかまへ子孫長久の地を考ふるに津國福原より勝れたるはなし、たとへ君臣の禮そむくとも中國西國の人々さへ心かはりたになくは、須磨の關をかため葛葉山山崎の大城戸を閉て、船路の通路を專とせんとするに兵庫難波崎とて船の泊惡敷處なれば、いつれの風にもつなく處なし、鳴門の潮先を切て島を築て兵庫を湊となし、難波入江の高淵を流し、江口神崎へも心よく廻船を入茨木長柄總して攝河兩國の水路をよくし、淀一口烏羽河内の沼ども干あかる程ならば田畠に利あり、淀川の水をよく利せは高瀬の往還わすらひなく、畿内の繁昌寶島となるへしとて、是を胸肩氏國器用方便をかり斐コニの忠治郎妙典の子なりの門司の藤内紀四郎景則奉行として、長門周防丹波播磨紀伊和泉より役夫を出させ、飛驒の匠木曾の杣方總して内裏供御料所の正税といふとも御祭會料の外に十分一の課役を取て、不日に成就せんと、應元元年二月八日に築き始め過半成就の所に、八月に至て大風大波立て一夜に是をゆり失ひ跡方なくなりけるか、又三年の彌生阿波民部重能を奉行として終に成就すと舊記に見へたり、人〇の事は奉行頭人諸役人大工鍛冶石工船役の者まで怠りさせまじきとの清盛か旨一つにありて大功はなしたる、其勢ひにあらずはいつか成へきの時あらん、實に莫大の鴻業にして、今も兵庫の里俗清盛様と尊信すといへり、町を出て湊川なり十丁程行街道より二丁計左坂本村田圃の中に楠正成の碑あり、水戸黃門光圀公建る所に、家臣佐々木助三郎奉行し、石面に黃門公の筆にして、嗚呼忠臣楠子之墓とあり、裏には、明の徴士舜水の文あり、碑石は和泉敷石は攝河にして、三國の石なり、塔中石櫛に圓鏡一面を藏め、楠正成靈光圀造立としるしたるとなり、楠

り、淀川の水をよく利せは高瀬の往還わすらひなく、畿内の繁昌寶島となるへしとて、是を胸肩氏國器用方便をかり斐コニの忠治郎妙典の子なりの門司の藤内紀四郎景則奉行として、長門周防丹波播磨紀伊和泉より役夫を出させ、飛驒の匠木曾の杣方總して内裏供御料所の正税といふとも御祭會料の外に十分一の課役を取て、不日に成就せんと、應元元年二月八日に築き始め過半成就の所に、八月に至て大風大波立て一夜に是をゆり失ひ跡方なくなりけるか、又三年の彌生阿波民部重能を奉行として終に成就すと舊記に見へたり、人〇の事は奉行頭人諸役人大工鍛冶石工船役の者まで怠りさせまじきとの清盛か旨一つにありて大功はなしたる、其勢ひにあらずはいつか成へきの時あらん、實に莫大の鴻業にして、今も兵庫の里俗清盛様と尊信すといへり、町を出て湊川なり十丁程行街道より二丁計左坂本村田圃の中に楠正成の碑あり、水戸黃門光圀公建る所に、家臣佐々木助三郎奉行し、石面に黃門公の筆にして、嗚呼忠臣楠子之墓とあり、裏には、明の徴士舜水の文あり、碑石は和泉敷石は攝河にして、三國の石なり、塔中石櫛に圓鏡一面を藏め、楠正成靈光圀造立としるしたるとなり、楠



の木像も安置したり寺は醫王山廣巖寺といへり、建武三年五月廿五日楠公の一族七十二人二行に居並ひ一同に切腹せしといへり、其遺骸は今の石塔の地に葬りしといへり、本堂の聯板に開山佛日焰惠禪師明極和尚示寂建武三年九月二十七日楠正成戰死建武三年五月廿五日四十三歳とあり、生田に至る生田明神の社あり、大社にあらずといへとも神馬堂繪馬堂無殘經營にして、拜殿本社結構なり、社前左の方に敦盛の萩えびらの梅右に梶原の井等あり、社の傍より道を左に取一丁計にして生田川あり、水源は布引の瀧より流る、十二丁にして、布引の瀧に至る此所より摩耶山への道ありて標石を立たり、布引の瀧高さ二十四丈にして、一筋に瀧壺まで落る有様さながら布をかけたることく、殊に南面すれば兵庫尼ヶ崎難波の浦まで廻畔の内に鮮にして絶妙の景地なり

○立ぬはぬ天津乙女の夏衣

かけてそさらす布引の瀧

此處より山路を上下して谷上村に出、からとを過て有馬温泉に達す、入口に清朝人の書にして日本第一の靈泉と云碑あり、客舎兵衛喜右衛門行程六里半。

二日天氣吉

同日逗留温泉に浴す、當所の温泉は海内に冠たる事世の知る所にして、欽明天皇三年始攝州有馬温泉涌出と原文に朱註せり、諸病に功驗いちしるしく中風瘡毒には禁忌なりといへり、浴する事生質の健否に依て増減ありといへとも常人五度を以て限とす、浴室三ヶ所にして沸騰の勢甚しく味別て鹹し、實に無類の名泉なるへし

○いつまでもかきりはさらにあらかねの

土の出湯のさむる間そなき

南の方に薬師堂湯神堂あり、民屋五百軒餘旅舎よろしく、竹細工挽物鹽山椒等を産す。

三日天氣晴明

明半時旅装を束ね、出宿舟坂村を過て生瀨に至る、此間山路川に沿て下る、兩邊巖峨々と聳へ景地なり、小濱に達す此處一橋様御領處なり、此處より田野ひらけ平坦なり、こやに至伊丹を左に取深田村を過、程なく尼ヶ崎への別れ道有て



標石を建たり、道を左に取神崎に出此處官道なり、神崎出口川有舟渡しなり、一里にして十三に至る、入口に十三川あり是又舟渡しなり、此處より阪城巍然として見へたり、大阪に達す、旅亭平野屋左吉行程八里、長廻橋堺町筋と云へり

四日天氣晴明

同日阪府より泉州堺を一見す、五ツ頃亭を出先日、本橋の詰より道を左に取高津の宮に詣す、仁徳天皇を祭るといへり、右に稻荷の社左に神輿堂神殿の傍に高臺の頌と云碑あり、高き屋の御製を刻して立たり、阪府一眸の裡に鮮にして佳景なり、四丁程南に生玉の社あり、右に本地堂あり、極彩色にして經營尤よろし、夫より四天王寺に達す、用明天皇二年厩子皇子聖德太子建天王寺、及び正慶元年秋八月楠正成詣天王寺開秘府見未來記と原文に朱註せり、聖德太子守屋誅戮以後の御創造七堂伽藍にして佛法最初の御寺なり、本堂の前に石の舞臺右脇に龜井の水あり、寺領千五百石道を右に取一心寺といふ寺あり、寺内に本多出雲守石塔あり、南の方に茶白山御陣場あり、天下茶屋に出村を過て左の方に岸の姫松あり、少し小高き所一村の松原を云へり、攝州一の宮住吉四所の社へ

詣す、街道左の方に石の大華表左右繪馬堂諸國より寄進の石燈籠連綿たり、四の社三の社夫より二の社次に一の御本社なり、右に楯の社おもとの社神樂堂其外末社多く、左に神輿堂神庫神馬堂社内廣大にして神威晃々たり

○跡たれて其名もしるき神垣の

松風すゝし住吉の濱

五丁程西の方海面に燈籠あり、濱の燈籠と稱し海上安全のため又且渡海の目當とす、社領二千六十石神主津守某、三丁計行て安兵町東側に難波屋笠松といふ有り、偃蓋の如く枝葉繁茂して殊に風流なり、此地往復の遊客駕をとめすと云事なし、九丁南に攝泉の境にして大河なり、橋を大和橋といへり、堺に達す町中程東の方へ一丁程入り妙國寺なり、日宗にして庭前の蘇鐵は世のしる所の海内一なり、根の廻り貳丈五尺大枝壹丈貳尺長さ貳丈餘織田侯の詠あり

○妙なれや國にさかゆく名木の

聞しにまさる一本のかふ

寺領百二十石、夫より堺の波濤に至る、西面に淡路島又島を遙望し、左は紀州崎



右は西の宮より尼ヶ崎兵庫須磨の浦々を觀し、大洋限りなく商船輻湊の地に  
して四民軒をならへ功用多らすといふ事なし、殊に鐵器を製する者三十六家、  
其他の鑄匠枚擧しかたし、世に名高き國産なり、此處より旅亭へ戻る

○なかめこしたくひも波のほのくくと

難波の浦の曙のそら

五日天氣晴明

五つ時出宿、農人橋より御城廻り、眞田出丸に至り、天満橋を過て天神宮へ詣す、  
此邊去る大鹽一亂の節、宮殿を始め民屋數千軒焼失す、依て新たな御造營にし  
て結構を盡せり、西門跡より座磨の社木、津川の大湊に至る、淀川の下流にして  
諸國の廻船大小の商船幾千といふ數をしらす、阿彌陀ヶ池に至る、是難波の地  
なり、四ツ橋にかゝり旅亭に戻る、御城代信州上田松平伊賀侯、暮少々過舟を雇  
淀川を上り、早天橋本に着船す、舟路八里。

六日天氣吉

同朝橋本の茶店にて休憩し、山崎の渡し、神龜三年釋行基造山崎橋と原文に朱

註せりを越て、山崎離宮八幡に詣す、社領千石至て古社なり、壹丁程東の妙喜庵  
といふ寺あり、天正十年六月豊太閤此地にて明智光秀と接戦の砌、當寺に於て  
千の利休茶を呈上せし數寄屋あり、軍卒に令し一夜御造營ありといへり、三疊  
隅爐なり、此茶室にて合戦機密の御談話有しといへり、御座の間の床は狩野永  
徳の山水の畫なり、庭前に袖すりの松と云あり、妙喜庵の額は東福寺南周和尚  
の筆なり、寺僧應接して叮嚀を盡せり、寶寺に至る豊太閤の御本陣此處なり、右  
に三重の塔右の方より天王山への坂路ありて石の鳥居あり、觀音寺へ詣す境  
内觀喜天の社あり、左に東照宮の御宮鐘樓在り、鐘は異形にして余の鐘にかわ  
れり、夫より橋本へ戻り四丁程にして八幡への道あり、坂路十六丁にして男山  
八幡宮なり、清和天皇貞觀元年八幡移山城男山と原文に朱註せり、石の鳥居二  
ノ門廻廊は二十四間四方拜殿本社極彩色、間に渡せる水樋黄金にして渡り十  
三間廻り三尺五寸結構言語に絶す、左右に多寶塔右の方坂中程に石清水八幡  
の社あり、社領七千七百石

○幾千とせ御代を守りの男山



動かぬ國の例し久しき

夫より道を左に取津谷村といふあり、舟渡しの川あり、是大和本津川の下流なり、廣野新田にかかり、宇治へ達す、世にあまねき茶の産所なり、平等院に至る、左の路傍に縣明神の社あり、平等院へ詣す、本堂の向に鳳凰堂といふあり、宇治關白頼通公の御建立、永承六年建立と原文に朱註せり、にして頗る大禪刹なり、然れとも甚破壊して見へたり、左の方に源三位頼政公の五輪あり、法名建法津山、頼圓治承四年とあり、頼政年七十五と原文に朱註せり、二丁程東の方に扇の芝とて頼政自盡の處にして一株の松并に碑石等あり、宇治橋、孝德天皇大化二年元興寺道昭始造、宇治橋と原文に朱註せり、をわたり朝日山惠心寺に至る、惠心僧都御法最初の寺にして傍に離宮明神の社あり、三室戸へ詣し、黄檗に至る、初の門に第一義の額、山門樓上黄檗山、下に萬福寺佛殿、に大雄寶殿各隱元禪師の筆にして、日本黄檗の開闢寺、領四百石、頗る大禪刹にして目を驚かす、伏見六地藏に出御香の宮へ詣し、藤の森天王に至る、大社なり、社領二百石、夫より京の稻荷へ達す、元明天皇和銅四年崇稻荷大明神於山城國紀伊郡と原文に朱註せり、

日本稻荷の總社にして、經營甚結構を盡せり、社領百七十石、東福寺に至る、通天橋紅葉の名所にして秋の頃は騷客夥し、瀧の尾に詣し、旅亭へ着す、客舎六角堂前、筑前屋治郎左衛門行程八里。

七日朝の間少少雨降間もなく晴

同朝上田三英來訪し、故國の情を述談話時を移す、村山玄杏下午より來訪し、同く別後の情を述一同亭を出て、祇園へ詣す、四條寶徳四年造四條大橋と原文に朱註せり、より祇園新町の遊里を過西の門より入、此邊洛陽第一の繁華なり、祇園は頗る大社にして、社領百四十石、貞觀十一年遷祇園山城愛宕郡と原文に朱註せり、南の門を出二軒茶屋を過清水寺に至る、大同二年坂上田村麿の建立なり、延暦十七年秋七月將軍坂上田村麿造清水寺と原文に朱註せり、奥院地主權現、田村麿朝倉堂三重堂、音羽瀧境内廣く櫻數樹ありて花の頃には猶更騷客日日群集す、社領百三十石、夜に入寺町通より亭に戻る。

八日天氣吉八つ頃大雷霰降間もなく快晴

同日五つ頃出宿、本能寺に至る、寺内に織田信長公の塚あり、寛仁二年釋行圓建



草堂號行願寺天正十年六月二日明智光秀弑信長於本能寺信忠於二條新殿と原文に朱註せり草堂より百萬遍に至る智恩院と號す夫より吉田へ詣す日本六十餘州の神神を勸請し諸國の神祇官當所吉田殿より出す社領七百六十石眞如堂に至る寺領百五十石黒谷に達す淨土宗四ヶの本寺なり建曆二年正月黒谷法然源空寂建永二年秋九月熊谷直實法師蓮生寂黒谷と原文に朱註せり法然上人の開基熊谷堂敦盛熊谷の石塔左の方に山崎關齋の塋あり境内に紫雲石紫雲山金戒光明寺といへり寺領百五十石詩仙堂に達す石川丈山隱遁の古跡なり俗稱石川嘉右衛門其性頗英傑にして神君の近侍たり大阪軍役の砌諸軍に魁して神君の不興を蒙り洛の東山に隱居す漢晋唐宗の名家三十六人の詩選あり畫は狩野探幽の眞跡にして本朝三十六歌仙に擬す勅に依て名所に入四方の文雅至らすと云事なし銀閣寺に至る東山義政公の宅地にして風流の庭なり二重の銀閣あり東求堂として義政公經營の茶室あり是茶室の始なり永觀堂より南禪寺に達す臨濟派にして五山の上なり龜山法皇の皇居なりいを開山大明國師に給ふといへり寺領千石智恩院に達す淨土宗總本寺元祖

圓光大師宗風開發の靈地にして本堂始寺中都會奇麗を盡し愉旨頂載の間宮様御成の間等古法眼元信の畫狩野累代の能畫又は土佐家の畫善盡し美盡せり寺領七百石圓山に至る僧坊多く景色よろし夫より長樂寺に達す是又洛陽を眼下に觀し甚佳景なり少少南に行て東大谷親鸞上人御廟處なり双林寺西行詣安井御門跡を過て高臺寺に達す太閤北の政所御建立寺の亭時雨の亭等甚風雅にして寺内萩多く秋の頃は貴賤遊樂すといへり八坂の塔白鳳七年秋八月建八坂塔と原文に朱註せりを過て清閑寺なり歌の中山といふ夫より大佛殿方廣寺に至る後陽成院御宇天正一號十四年十六年豊太閤建立し秀頼公相續して再建し本尊坐像高サ九間五尺堂の南北四十五間〇の廻り凡三間外面石垣三間程の大石にして廻廊南北百二十間東西百間日本無双の大堂なりしか惜むへし寛政十年七月二日雷火の爲に焼失す鐘樓は猶残りて鐘の高さ一丈四尺渡り九尺東の方に三十三間堂あり後白河法皇御願として千體の觀音崇徳院長承元年春三月上皇建得長壽院造三十三間堂安置一千一體金佛と原文に朱註せりを安置す矢員場にして諸家藩士の額面數多あり傍に耳塚あり朝鮮征伐



の節耳を持來り埋しといへり、道を六條通に取兩門跡へ詣し歸宿す。弘長二年冬十一月一向宗開山親鸞於洛五條西洞院寂類齡九十と原文に朱註せり。

九日天氣晴明

五つ頃出宿禁裏御所仙洞御所廻りを拜見す。桓武天皇延暦三年六月始營山城國乙訓郡長岡都同十三年冬十月天皇遷幸新都詔以後平安城と原文に朱註せり。御築地南北八丁東西六丁四方九ヶ所の御門御所の南北九十八間東西百二十五間東の御門を日の御門南を南門西を公卿門といふ。御臺所御門は公卿門の北にあり、御門内紫宸殿の廻りに廻廊あり、正面を承明門東の御門を日華門西を月花院といへり、此處常の雜人通行をゆるさず、仙洞御所は南の方なり、攝家清華方の邸宅相並んであり、西の陳を過て北野天滿宮へ詣す、天德三年右大臣師輔公造立し給ふ。仁明天皇承和十二年菅承相降設昌泰元年任右大臣延喜元年春二月被讒左遷大宰權帥同三年春二月薨于配所歲五十九延長元年詔燒左遷宣旨復本官贈正二位天曆元年秋九月以菅相亟廟始移立北野同九年春三月稱天滿天神正曆四年夏五月贈太政大臣正一位勅使下筑紫安樂寺宣詔神

託詩曰昔爲北關被悲士今作西郡雪恥屍生恨死觀其我奈從今望足護皇基と原文に朱註せり。洛陽社にして神威日々に新なり、社領五百八十石別當松梅院、道を西に取衣笠山延文三年四月正二位前大納言尊氏薨歲五十四葬衣笠山麓號持院と原文に朱註せり。を右に見ならひか岡への道あり、足利累代の廟所等持院を過て龍安寺なり、細川右京太夫勝元建立にして寺領三百九十石境内に池あり、冬の頃水鳥多しといへり、妙心寺に達す、禪宗五山の外大德寺を以て大寺とす、坊宇多く寺領四百八十石仁和寺宇多天皇仁和四年秋八月造門跡之始也と原文に朱註せり。御室の御所に至る、東の方に五重の塔御宗領千五百石境内櫻多く花時には洛中洛外の貴賤群集す、鳴瀧を過て廣澤池東西五丁程南北三丁程月の名所なり、嵯峨清涼寺に達す、本尊赤構檀、永延元年釋齋然自宋朝歸朝特來釋迦尊像と原文に朱註せり。天笠毘者羯摩の作釋迦如來の尊容寺領九十七石寺中に百萬の塚あり、愛宕山を右に取二尊院に詣す、小倉山是なり、麓の右の方に定家卿爲家卿御舊跡あり、頗る幽寂の所なり、厭離庵と云へりと原文に朱註せり。道を東に取野々宮を過て天龍寺なり、五山至德二年七月將軍義滿定



五山之列位一、天龍寺二、相園寺三、建仁寺四、東福寺五、萬福寺と原文に朱註せり。の第一にして寺領千七百五十石、曆應三年足利尊氏建天龍寺以疎石爲開山夢。窓國師是也と原文に朱註せり。夫より嵐山に至る麓に桂川の流ありて橋をわたせり。渡月橋といへり。河邊に三軒屋の茶亭あり。花の頃は文雅騷人遊宴す。路傍右の竹林に小督の柴の扉の寺あり。小督の墓は一堆の塚に楓一株を植たり。橋を渡り法輪寺に達す。和銅六年建嵯峨郡と原文に朱註せり。虚空藏を安置す。寺領七十石。加賀利家卿御内室芳春院の御再建といへり。松の尾に詣す。祀る所大山作神市杵島姫の二坐にして社領九百三十石。夫より梅の宮に至る。四坐の神にして橘氏の祖神といへり。四條通へ出て旅宿へ戻り齋藤定之進の招請に依りて二條御役所に至り。深更に及び歸宿す。二條所司代若州若狹侯御町奉行田村伊豫守殿。遠江守殿

十日天氣晴明

五つ頃出宿。二條御城廻りより紫野大德寺に至る。後醍醐天皇の勅願所にして大燈國師の開基。一休和尚居住せられ。文明三年冬十一月大德寺一休和尚寂壽

八十八と原文に朱註せり。四十二院の坊中あり。寺領二千四十石。長保三年夏五月祭疫神於紫野今宮是也と原文に朱註せり。今宮に詣し鹿莊寺に至る。應永四年足利將軍鹿苑院義滿公造立金箔を以て三重の樓閣を粧ひ。應永十五年五月大相國義滿薨。歲五十一號鹿苑院と原文に朱註せり。後小松院の宸翰窟竟頂の額あり。西山金閣寺。是なり。數寄屋にはなんてんの床柱。前には池水をたゝひ。衣笠山を眺望し。奇觀たくひなし。平野へ詣し北野千本通りより壬生寺へ詣て。鳥原の遊里を過て大通寺に達す。源義基公の靈廟にして六孫王權現と崇る。寺領二百八十石。東寺に至る。延暦十五年東寺建と原文に朱註せり。護國寺と號し。桓武天皇御宇弘法大師開基にして真言宗の源なり。右の方に五重の塔あり。高さ二十九間。羅生門は都の南大門といへり。寺領二千三十石。夫より御願堂錦の天神へ至る。誠心院へ達す。和泉式部の墓。軒端の梅あり。旅宿へ戻る。遊佐岱三郎武者。廣人上京し郷書を達す。

十一日天氣晴明

同日齋藤氏より招請に依て五つ頃より西御役所に至る。一條正直來訪し饗應



頗る懇切にして夜に入歸宿す。

十二日天氣晴明

同日京地出發郷友族亭へ來訪し離杯を取て送別あり、旅裝を束ね晝九つ頃出立下加茂に至る、(欽明天皇二十八年加茂葵祭始と原文に朱註せり)天武天皇白鳳五年の建立にして祀る處御祖の神右の方に糺の宮あり、社領五百四十石、十八町西にして上加茂に詣す、當國一の宮なり、社の結構後に山の形うるはしく、前に川の流れいさぎよく、神威日に新にして誠に王城鎮護の靈社なり、本社分雷の神社領二千七百石、市原といふ所を過て關○寺○小○町の舊跡小町寺あり、貴船に至る、藏原伊勢人の建立といへり、鞍馬寺に詣す、延曆十五年の創舉坂路十丁計にして義經兒童の時住せられし東坊寺の宅地の跡あり、(承安四年春三月義經出鞍馬寺赴奥州と原文に朱註せり)僧正ヶ谷には義經劍術手鍊の所なりとて岩角に刀劔の跡おびただし、本堂は焼失して假殿計なり、寺領二百二十七石、當所に宿す、客舎大坂屋喜右衛門行程四里。

○所から都の空に安くかれて

はし居に受くる夏の夜の月

十三日天氣晴明

明半頃出立、道を取賤原小原を過て、矢脊の里に至る、若州への道あり、此處叡山への登り道にして入口にはせ出しの茶屋といふあり、山上迄坂路五十丁なり、十二丁程登り左方に元黒谷青龍寺間もなく城州近江の境なり、四五丁登り相輪塔王城の鬼門柱是なり、釋迦堂開山傳教大師大師堂(延曆七年僧最澄始開比叡山延曆寺建根本中堂澄者則傳教大師也同十三年成ル號一乘止觀院と原文に朱註せり)辨慶水戒槍堂(弘仁十二年夏六月勅築戒壇と原文に朱註せり)大講堂、根本中堂、横川は左の方にあり、當山は日本五岳の一にして 桓武天皇延曆七年傳教大師舉創王城鬼門鎮護の靈場なり、寺領五千石、四明ヶ嶽は右の方絶頂にして晴天には駿の富岳を望むといへり、坂路を下り中頃に要めやとりと云所あり、湖水扇のごとく(孝靈天皇五年江州地圻水始涌と原文に朱註せり)唐崎の松を望む、麓は山王の社大宮(天武天皇白鳳二年建大宮社江州坂本郷と原文に朱註せり)聖眞寺、客人宮、八王寺、三の宮、二の宮、十禪寺合せて七社なり、



天智天皇七年志賀郡建崇福寺號志賀寺と原文に朱註せり波止土院に詣し坂本町に出道を右に取唐崎の松に至る唐崎明神の社あり松の圍み三丈枝葉四方に繁茂して南北三十八間東西三十間に及び翠色鬱蒼として蟠龍の勢ひを顯はし無双の名木なり志賀の舊都志賀寺等の古跡は左の方にあり三井寺に至る寛平三年冬十月三井寺開山圓珍寂年七十八謚智證大師と原文に朱註せり觀世音の社前より矢走唐崎堅田を眺望し絶景なり本堂より奥の院に至る傍に梵鐘あり俵藤太蜈蚣退治報謝に龍宮より得しといへり甚異形なり同傍に三井あり天智天武持統の三帝御誕生の砌此れを以てうぶ湯に奉りしより三井寺と云しとなり今改めて圓城寺といへり大津に出つ驛中右に精大明神の社あり天智天皇六年春三月遷都江州大津と原文に朱註せり札の辻は京師への別れ道なり當所は京師の咽喉都會の驛にして大に繁昌し商屋軒をならへて功用足らすといふことなし當所より乗船し膳所を左に過城は水面に築出し天守櫓の形勢甚拔群なり城主本田下總侯采邑六萬石粟津松原元暦元年正月義仲敗死江州粟津と原文に朱註せりを左に取瀬田を過ぎ石山に達し宿す

旅亭松屋勘七行程七里。

○唐崎や一本松をしほりにて

矢走に歸る浦の友船

○夏今宵いつくはあれと鴉の海や

ささ波かけてすめる月影

十四日天氣晴明

明半頃出立石山寺に詣す本堂觀世音正面の額は當寺伽藍は江州北郡淺井備前守息女秀頼卿母堂爲二世安樂再興也とあり傍に紫式部源氏の間硯等寶物として開帳す式部越前守爲時之娘母常陸介爲信女也初號藤式部其性聰敏直和漢史籍善詠歌藤廼佛理嘗在石山寺撰源氏物語若干其言效莊子寓言以假爲真然筆端鼓舞之妙於國字粧撰之中最奇勝也就中若紫之卷詞言妙絕故改賜名於紫式部時人稱日本記局正暦三年卒と原文に朱註せり塚は二三丁奥の方にあり庭前の奇石佳景なり左の方高き所に別亭あり瀬田の二橋より湖水を觀し眞妙の奇景なり夏至の頃より洛中洛外の男女螢狩に群集し舟にて瀬田川



を逍遙し、その賑ひいはん方なし、勢田をわたり江州一ノ宮建邊の社あり、大江村新田を経て街道左の方に野路の玉川あり、田圃の中に跡のみ存して歌一首を石に刻して建たり、草津の驛に至る、左に矢走への別れ道あり、宿の出口に東海道中仙道の別れにして標石を立てたり、道の中仙道に取守山に至り宿を出て安智川かちわたりなり、右の方に三上山あり、此處遠藤但州侯一萬石の領所なり、篠原と云所あり、本藩大守公御領分なり、(文治元年六月誅宗盛及清宗旅江州篠原と朱註せり)屋棟川を過て鏡山に至る、街道右脇にあり、横行川を過て、武佐に達す、宿を出て西生成と云處是又御領所なり、清水崎神谷小畑を過て、越智川に至り宿す、驛入口に越智川あり、旅舎藤屋幸右衛門行程十里。

○山の名の鏡にはれし夕附に

かゝやくそらはくもるともなし

十五日天氣曇晝より風吹夜に入雨降

明六つ時出宿、出橋、枝村、つうやを過て、高宮に至る、入口に高宮川あり、高宮布を産す、驛中右の方に多賀神社、石の華表三十丁にして多賀の神社當國の大社なり、

左の方に阿彌陀堂あり、美麗莊嚴なり、別當不動院又三十丁にして街道に出、左の方に彦根の城みゆる、鳥居本に達す、此間に小野の細道と云あり、其實地はふます、町中左の方に彦根道あり、驛を出三丁程過て中仙道北陸道の別れ道あり、(文武天皇大寶二年始開美濃國岐蘇山道と原文に朱註せり)道を北國に取梅原を過て、米原に至る、此處より大津への出船あり、いかり高はしと云を過て、長濱なり、此處よりも大津彦根竹生島、景行天皇十年江州竹生島始生と原文に朱註せり)等への出船ありて甚賑へり、昔の城跡は町の左の方にあり、此邊養蠶を業とすとみへて能桑を植えたり、○村、大谷、早見の村を過、此邊右の方に淺井備前守長政の城跡、小谷の庄の間近く見えたり、高付千田の村にかゝり、木の本に達し宿す、北國屋泰助行程十二里。

十六日朝の間少々雨降五つ頃より稍晴

明半頃出立、驛の中頃、右の方に木の本地藏跡あり、町を出て左の方餘、吾の海賤ヶ嶽、諸將砦の跡あり、(天正十一年夏四月秀吉發兵與佐久間盛政柴田勝家戰志津嶽柳瀬北軍大敗と原文に朱註せり)中川瀬兵衛清秀戰死の場所は街道より



十丁計左の方にして、賤ヶ嶽續きの尾崎なり、木下小一郎秀長、堀久太郎秀政等の砦の跡は街道右の方なり中の郷東野大谷の村々を過て、梁ヶ瀬に至る、此所より福井侯御領所にして町出口に關所あり、椿市の驛を過椿坂といふ有り、峠を越て、中河内に至る宿より一里半にして朽木峠といふ所あり、此所近江越前の境なり、板取に達し孫谷落合の村を過て左の方に敦賀若州への別れ道あり、今庄に着し宿す、旅亭長濱屋九右衛門、行程十里。  
十七日天氣吉

明少々過出宿驛を出て間もなく湯の尾峠といふあり、峠の茶店にて疱瘡の守を出せり、峠を下りて湯の尾なり、街道右の方に木曾義仲の城跡あり、鯉江、臨本今宿の驛を過て右の方高山に日野權現の社あり、越前に入り山林樹木繁茂し此邊より田圃もひらけたり府中に達す、福井侯御附家宰本多内藏之助殿采地二萬石、驛中大に繁昌せり、邸宅は驛中比右の方にあり、鯖江に至る、入口に川あり舟渡しなり、日野川といへり、上鯖江を過て、下鯖江なり、領主間邊下總侯采邑五萬石城は左の方に有り、城下は寂條として府中杯比すへきにあらす、水落に

至る路傍左の方に神明の社あり、麻生津を過て北の莊は街道五里程右に當れり、赤坂鳥羽新町を過て、福井城下なり、町中に川あり橋をわたり左の方に城あり、松平越州侯采封三十二萬石、此處より曹洞本山永平寺建長五年曹洞宗祖道元寂年五十四と原文に朱註せりへ三里あり、舟橋に達す入口に川あり、九頭龍川といへり、四十七艘の舟橋を掛たり、當所に宿す、客舎素麵屋庄右衛門行程十一里。

十八日天氣晴明

明半頃出立、〇崎に至る町中頃より一丁右に入左中將新田義貞の靈廟あり、驛を出て右の方に丸岡の城下見ゆる、采地五萬石有馬左衛門侯五本村を過、金津に達す宿を出て柿原と言村あり、二丁程行て嫁おとしと云處あり、むかし武家の嫁念佛宗へ歸依し日毎に吉崎の御坊へ參詣しけるを姑ふかく妬み、ある時面を掩ひ異形の體に出立、此所に來り嫁の通りをおひやかしかけるか、嫁は佛力の擁護にや少しもおそるゝ事なく、却て姑の掩ひし面皮肉に付て、さらに放るゝ事なし詮方なくよし崎の御坊へ至りひたすらに罪を懺悔し、發心して念佛



道に入たるよし近代標石立たりと里人の物語りなり、蓮浦といふ所より舟に  
乗右に吉崎左に濱坂を過ぎて、鹽屋といふに至る、越前の湊にして堀口といへ  
り入海にして景地なり、此所より川舟にて登り大聖寺に至る、陸地にては細呂  
木と立花の間越前加賀の境なり、舟路にては吉崎より加州なり、三里にして大  
聖寺城下中程に着船し、城は町の左の方にあり、城主松平備州侯采邑十萬石城  
下甚よろし、城下出口に岩津明神の社あり、さくみを過て、いぶり橋なり、驛中左  
の方に山中温泉への道あり、宿を出て右の方に白山半腹より以上雪を帶たり、  
此邊高山都て嶺上に雪残り、月津の驛を過て久志と云處あり、小松へ達す入  
口に多田八幡の社新田義貞の願狀實盛の甲冑等あり、小松は加州侯持にして  
頗る繁榮の城下なり、旅亭林屋壽門行程十二里半。

○おくれしと野澤のしみつせき入て  
とる手ひまなき賤か若苗

十九日天氣晴明

明半時出宿、小松の驛西の方に安宅の關の跡あり、濱邊なり、寺井栗生を過て川

あり、舟渡しにして手取川といふ大河なり、川幅二十丁出水の節は湊へまはる、  
然れとも此節水甚涸れたり、水島の驛を過てふとみ村にかかり、柏野、松任、野々  
市の三驛を過て、金澤に達す、城は右の方にあり、城下中頃に犀川と云ふあり、城  
下は九十丁餘にして甚長しといへとも結構ならず、藩中一通以上といへとも  
嘗て絹布を用ひす、至て素服なり、國禁素質嚴重なりとみへたり、越中越後の境  
に至り加州侯番所あり、金府町役よりの印鑑を所持せされは通行をゆるさ  
る國法なり、依て當所より持參す、四月十七日二千軒程焼失せり、柳橋森本今町  
二日市と燒き町、中條等の村を過て、つばたに至り宿す、今晚亦以金府大火千  
軒餘焼失のよし翌朝聞て、當驛に寓りし事旅中の大幸と同行申合へり、旅亭油  
屋清左衛門行程十二里。

二十日天氣晴明

明半前出宿、松の瀬坂といふ有り、竹の橋の驛を過て栗から峠なり、壽永五年夏  
五月平家與義仲合戦加越兩州境砥波山平軍敗人馬悉沒、貝利伽羅谷と原文に  
朱註せり、木曾、義仲、牛の角に、松明を結付て大勢の敵を追落せし古宿なり、坂路



一里半程にして左の方に俱利伽羅明王の社あり、此處加賀越中の境なり、峠を下り石坂村はるふ村八幡の社あり、今動木の宿に至る、相應の驛なり、此處より乗船しおやべ川と云を下り、四里にして高岡に着船す、此驛頗る繁榮にして商家甚よろし、宿を過て大門と云所あり、中程に川あり、舟渡しにして庄川といへり、小松に達し宿す、稻住屋彌五右衛門行程十一里。

二十一日天氣吉夜に入雨降

明半時出宿驛を出て追分といふ所あり、富山と岩瀬への別れ道なり、道を右の方に取、富山の城下に至る、町に入間もなく神通川の大河あり、六十四艘の舟橋をわたせり、日本第一の舟橋なり、城は平城にして左にあり、松平雲州侯采地十萬石相應の城下なり、左の方に立山の高嶺半腹以上白雲を帯ぶ、文武天皇大寶三年釋教與勸請立山權現於越中國と原文に朱註せり、六月朔日より七月晦日迄の外參詣をゆるさず、山の形勢峨峨として甚嶮岨に見えたり、新庄といふ小町を過、水橋に至る、此處岩瀬よりの街道に落合り、舟渡しの川あり、あまかせ川といへる、湊なり、此所より海邊にして能登の崎より佐渡を遙に望めり、滑川に

達す、驛を過て笠城川間もなく早吹川と云大河あり、各かちわたりなり、魚津入口にて、末の中越、西南水橋の方に當り、蜃樓を見たり、東海道桑名の海にて、名古の蜃樓とて、たまたま見る事ありといへとも、此地にて見る事、旅中第一の奇觀なり、里老の物語にも甚稀なる事にいへり、魚津の驛甚よろし、宿を過てかた名川と云あり、此岸水無しといへとも、是亦大河なり、ふせ川を過て、三日市に着し宿す、麻地屋新左衛門行程十二里。

二十二日雨降

五つ頃出立、浦山を過て黒部川といふあり、橋を合本の橋といへり、蜘蛛なしにわたせり、いろは川ともいふ、上流四十八瀬あるゆへなり、三日市より下道を通行すれば、行程一里程近し、舟見の宿に至り、町を過て小川と云あり、かちわたし、二た村を過て、泊へ達し宮崎村を過堺なり、此處に加州侯番所あり、金府より持參の通劃を出して通行す、出口に川あり、堺川といへり、是越中越後の堺にして、此所より高田領なり、玉貫村を過市振驛に至る、入口に高田侯の番所在り、宿を出て一里程にして、親しらすと云所あり、その間五六丁、右は山峰峨々として、左



は海面にして浪の々し引を見合須臾の間に通る浪立荒き時は一步も進事不叶北陸第一の難所なり磯邊を行事二里にして外浪なり間もなく哥に至り二十丁斗りにして此所にも駒かへりといふ大難所あり親しらすにことならず市振より海邊郡へ四里にして青海に達す此間海邊砂地斗にしてよろしからず民家石灰焼を事とす入口に青海川ありかちわたしなり驛の入口左の方に大筒の○壇を構たり高田侯海岸軍用の手當にして當所より一里又は一里半程にして浦ことにあり當所に宿す客舎渡部屋金兵衛行程十三里。

○そなれ松八重の汐かせ吹しほり

晴間もなみの五月雨のそら

二十三日天氣晴明

同日ひめ川出水舟留のよしに付○○し四つ頃出立とふみつ澤の村を過ひめ川の舟渡しを越寺嶋より糸魚川に至る松平日向侯祿地壹萬石町入口右の方に陣屋ありおし上川かちわたり竹原大和川を過鍛冶屋敷に達す浦もと鬼伏この浦を過て能生の驛なり宿を出間もなく右の方に能生の社ありて路傍に

能生の汐路の名鐘といふ芭蕉翁の碑あり此鐘いつの頃より有りしといふ事をしらす汐のさす折にはさはらすして一里四方ひさしゆへ此里にては海士の子も汐の差引をしれり常陸坊追銘ありしか明應年中焼失し殘銅を以て能登國中居の浦なる鑄物師に鑄させ今に殘せし由を記せり程なく能生の泊り百川藤崎つゝ石の浦々と過名立に至り宿す此邊浦々風景よろし旅舎岡崎屋金右衛門行程八里。

二十四日天氣晴明

朝半前出宿なへのうら坂茶屋河原と云あり夫より有馬川長濱の二驛を過五智に至る路傍左の方に安國山國分寺と云寺あり五智如來を安す聖武帝天平九丁丑の開闢にして弘化三丙午に至つて一千百九年なりといへり五丁計り北にして今町なり商屋千餘商船湊の所にして賑ひり五智村街道右の方に丸子山と云念佛宗の寺あり此日高祖聖人の法會なりとて老若群集す此所より田野ひらけたり中屋布を過高田の城下に達す榊原式部侯采封十五萬石城は左の方にして平城なり大手向よろしからず城下中頃に江戸奥州別れ道あり



て標石を立たり、道を右に取、信州路に赴き、城下を出て、茶屋町と云あり、新井の驛二本木松崎を過て、關山に着宿す、村越宗兵衛行程十一里半。

二十五日細雨晝より快晴

明少々過出立右の方に妙香山と云高山あり、太田切、二股、小田切の驛化粧坂を過て、關川に至る町出口に高田侯番所あり、宿の出口に關川あり、今町の湊へ落る、此處越後信濃の境なり、野尻に達す、町の東裏に野尻の大池といふあり、高田邊より此邊積雪平年一丈餘にして十月頃より二月の頃迄人馬往來不叶といへり、野尻町出口より道を右に取、戸隠山に至る小みちにして甚よろしからず、山原計りを行事五里、此間民家さらになし、本社より奥の院へ三十丁女人を禁す、祀る所九頭龍權現別當實道院社領千三百石坊中三十六宇、東南の方に淺間か嶽みゆる坂路を下る事四里にして善光寺に着し宿す、和泉屋平作行程十三里。

二十六日天氣晴明

同日明六の時善光寺へ詣す、定額山と云へり、仁王門山門本堂大伽藍なり、本尊

右の方に本田義光義助等に三佛を安す、毎朝六の時開帳あり、老若貴賤袖をのいて群集し頗る大靈場なり、山門右の方に大勸進二王門の左に尼宮御殿坊舎四十六宇寺領千石旅宿へ戻り装束を束ね出立、大門前より道を右に取、荒町に至る、此間町續きなり、東に筑摩川の流れあり、信濃川とも云へり、新潟へ落るなり、平井村より牟禮驛、落蔭村、大古間、柏原を過て野尻に至る、此處より行路元の如く、關山に達し宿す、旅宿前に同じ行程十里半。

二十七日曇晝より雨降追々大雨

明六つ頃出立、高田の城下に達し、町中頃より道を右に取、春日新田に至る、左は關川の下流、今町の湊なり、佐内福島を過て、黒井驛に至り、四つ居濱を過、片町に着宿す、伊勢屋清十郎行程十一里。

○豊年のためししられて今よりも

露おもけなる小田の若苗

二十八日雨晴風吹晝より天氣吉

明六つ時、出立、鴈子直海の濱を過、かき崎に至る、此邊鹽焼を業とす、鉢崎に達す



町出口に高田侯番所あり、上和村を越て峠あり、龜割山といへり、判官義經加賀國戸樫の關を越此所を通り給ふ折北の方龜若丸を此地にて誕生あり、不安柳胞衣姫明神胞衣の池白糸の瀧なととて舊跡あるよし茶店に縁記あり、右に米山といふ高山みへたり、三輪笠島近江川の濱村を過高田領の堺あり、是より勢州桑名領なり、鯨波に至り下宿中濱より柏崎に達す、民屋三千餘商家多く繁昌せり、驛中に三國への別れ道あり、宿を出て程なく右の方長岡への街道なり、道を左に取安くた村安くた川の舟渡しを越て、荒濱に至り、宮川を過椎谷に達す、領主堀泉州侯祿地一萬石居館は町の右にあり、旅亭蔦屋慶助行程十二里。

二十九日天氣吉

明半頃出宿、石地より出雲崎に至る、民屋柏崎より不足なりといへとも、商船輻湊し甚賑ひり、山田驛より五本七つ石おはたの濱村を通り、寺泊に達す、一里程にして街道より左に入弘智法師の行所あり、猿か馬場といふ峠を越て、海邊を放れ田野曠々たり、勸音寺村を過彌彦に至る、當國一の宮伊夜彦大明神、神領五百石大社なりといへとも、破壊したり、神主高橋兵庫介當所に宿す、客舎冥加屋

多右門行程十里。

晦日天氣晴明

明半頃出立、石瀬村より岩室に至り、竹野町ぬのめ松山を過て、赤塚なり、驛中に赤塚明神の社あり、丸山より内野に至り十八丁にして堺と云所より大西川を舟にて下り、舟路二里餘にして新瀨<sup>○</sup>に達す、信濃川の下流北越第一の大湊にして、商屋萬餘、大坂松前其他諸州の大船輻湊の地にして、繁華類ひなし、入口に白山の社あり、當所より佐渡へ舟路二十里、旅亭中屋與八行程九里。

壬五月朔日丁酉天氣吉夜に入雨降

朝五つ半頃旅裝を束ねて乗船し湊を左に取あか川と云に出つ、此川會津より落るなり、新川松崎を過舟路五里にして木崎と云所に着岸し堀割村にかゝり新發田に達す、領主溝口伯州侯采邑五萬石、城は平城にして左の方にあり、城下は廣からすといへとも、田圃大にひらけ地性もよろしく見得たり、城下出口に諏訪明神の社あり、右は會津道なり、社前より道を左に取かす川をわたり、加地に至り宿す、客舎柳屋義平行程八里半。



二日曇四つ頃より雨降

明半頃出宿行路二里にして菅谷不動尊へ詣す、靈驗日々に新なりとて老若群集す、別當菅谷寺社前に旅舎茶店あり、はこ岩越と云山道を通り、はこ岩に出横岡かな山かひやの村々を過、中條に至り此所より本郷通りと云近道あり、道を左に取本郷を過荒川と云あり、高野十二軒菅田の村々を過胎内川をわたり乙に達す、二王門右に三重の塔左に鐘樓本堂、頗る廣大にして大尊大日尊天平十一已卯草創にして當年に至り千八百八年、別當乙寶寺寺領百石、元の胎内川をわたり新保なほりかち山はるき山花立海月等の村々を過犬島驛に至、關に達し宿す、旅舎中橋屋庄吉行程十一里。

三日曇折々雨降

明半時出立、さら村を過て川有り舟渡しなり、川口と云所より山坂にしてありや峠といふ、落ふしと云所越後出羽の境にして番所あり、沼村より玉川驛に至る、此所に米澤侯番所あり出入をあらため、印鑑を出せり、夫より小國に達し黒川村を過、市の野に至り宿す、此間始終山坂にして險難なり、旅舎越後屋新兵衛

行程十里。

四日雨降雷聲あり夜に入大雨

明半前出立、白子坂、沼津、手の子に至る、此處は山坂なり、是より田野漸くひらけ平坦なり、松原小松の驛を過て鳴島もゝの川と云あり、米澤に達す、城主上杉彈正侯采封十五萬石城は中頃右の方にある、城下市塵よろしからずといへども、節儉を専らといふ、よろしく國業を守るとみへたり、客舎遠藤喜六行程十里。

五日大雨晝より細雨

晝過出立、大澤の驛を過て右の方なめ川の湯へ別れ道あり、板谷へ達す、城下を出て間もなく坂道にして大澤より此間板谷峠といふ、右の方に五色湯の温泉場あり、客舎佐藤與一郎行程五里。

六日天氣晴明

五つ頃出立、町出口に米澤侯番所あり、玉川番所より出せし印鑑城下にて引替右印鑑當番所にて相出し通行、産か澤に至り川あり、出羽奥州の境にして奥州信夫郡なり、此間山坂にして李平スモ、ミヒラに達し庭坂の宿に至る、入口茶店の脇より道



を左に取大笹生にかゝり、飯坂に至り温泉に浴す、當所白川侯御領地なり、旅亭  
網屋長右衛門行程七里。

七日天氣吉夜に入雨降

同日五つ頃出立、川を越て湯の村なり、此所にも温泉あり、桑折に出町西裏農家  
の後に本藩 満勝寺様の御廟所あり、梁川に達し宿す、桔梗屋喜八行程四里半。  
八日朝より細雨

明半時出立、旅行出發の如く、丸森に達し、角田に至り宿す、旅舎本多屋平藏行程  
七里。

九日曇

同日五つ頃同伴各親族旅亭へ迎に來訪し、間もなく出宿、佐倉の舟渡し邊より  
段々引續郷友門生酒肴を携へ、綠陰子稻荷堂迄來訪し、別後の情を述情話時を  
移し、綠陰子利定の邸へ立寄、相具に無事の歸着を賀し、八つ過達歸宅し、壽盞を  
探て祝酒を汲み、長途の無事を賀し畢ぬ。

○圓居してめくりも盡す汲かはし

もよろこひの宿のさかつき

仙藩 砂澤三郎兵衛

爲胤

○うらやまし見ぬ名所も見るはかり

こゝろにうかふ水莖の跡

丙午紀行 後編(地)

終



一、所經歷三十四ヶ國

陸奥、下野、常陸、下總、武藏、相摸、伊豆、駿河、遠江、三河、尾張、伊勢、伊賀、大和、紀伊、淡路、阿波、讚岐、安藝、備後、備中、備前、播磨、攝津、和泉、河内、山城、近江、越前、加賀、越中、信濃、越後、出羽

一、經歷郡名

陸奥。伊達、信夫、安達、安積、白川  
下野。奈須、河内  
常陸。茨城、眞壁、新治、河内、行方、鹿島  
下總。香取、殖生、印幡、千葉、葛飾  
武藏。豐島、荏原、足立、高麗、橋樹、久良岐  
相摸。鎌倉、高座、大任、足柄  
伊豆。君澤(可疑加茂ナランカ)  
駿河。富士、庵原、駿河、有度、安倍、志太、益津  
遠江。藤原、佐野、周智、豊田

三河。矢名、設樂、寶飯、額田、碧海

尾張。愛智、海部

伊勢。桑名、朝明、三重、河曲、奄氣、多氣、安濃、壹志、飯高、飯野、渡會、多度

伊賀。山田、相野

大和。添上、湊下、平郡、葛下、高市、式上、東市、吉野、宇治

紀伊。伊都、海部、名草

淡路。津名

阿波。板野

讚岐。大内、寒川、山田、香川、阿野、那賀、多度

安藝。加茂、沼田、佐伯、安藝

備後。御調、沼濃、安那、奴可、沼島

備中。後月、小田、下道、窪谷、都宇、加夜

備前。御堂、上道、邑久、和氣

播磨。赤穂、揖西、揖東、飾磨、加古、明石



攝津。八部、兔原、有馬、河邊、西成、島上

和泉。大島

河內。丹南

山城。乙訓、葛野、愛宕、紀伊、宇治、久世、綴喜、相樂

近江。滋賀、栗本、野洲、愛智、蒲生、犬上、甲賀、淺井、伊香

越前。南條、今立、足羽、吉田、坂井

加賀。江沼、能美、石川、河北

越中。砥浪、射水、新川

信濃。水内

越後。頸城、刈羽、蒲原、岩船

出羽。置賜

總計百五十郡

一、府城

陸奥。福島、二本松、白川

下野。大田原、宇津宮

常陸。土浦

武藏。金澤

駿河。沼津、府中、田中

參河。大平、岡崎

伊勢。桑名、神邊、津(安濃津)久居

大和。郡山、小泉

讚岐。多度津、丸龜

備後。三原

播磨。姫路、明石

山城。二條

越前。鯖江、福井

越中。富山

出羽。米澤

總計四十六

丙午紀行

下總。高岡、佐倉

相摸。小田原

遠江。掛川

尾張。名古屋

伊賀。上野

紀伊。和歌山(若山)

安藝。廣島

備前。岡山

攝津。大阪

近江。膳所

加賀。小松、大聖寺、金澤

越後。糸魚川、高田、椎谷、新發田



一、驛路悉有卷中

亡父君脩亮の北海道有珠郡開拓の際

新墾の勳にも看世國のため

盡す誠のならさらめやは

讀父君之丙午紀行而偶成

紙上坐知諸勝嘉隨看興味自然加於晴於雨旅行久到處風流詠國歌

又

同行同志兩三生相伴江山路幾程手澤猶存丙午冊雨晴兩是入旅情

嫡男 北州 佐藤 慎謹誌

明治丙申立秋前一日讀脩亮佐藤先生所著丙午紀行東自我奧西至藝州

跋涉三十餘州名地勝區莫一系探訪耳目之所觸悉載於筆端且間賦國風

挿之於卷裏以示其實況矣行文流暢溫雅使人嘆美非才能之士不能爲也

乃賦二絕以呈

納贊高門學義方回頭五十一星霜偶然懷起當年事親請先生讀紀行

見聞載筆極精詳三十餘州行路長即景抒情真摯處畫圖何若此詞章

春塘 松本俊 燾拜草



丙午紀行 附録

(東海道名所古跡略記)

陸奥 桃園 佐藤脩亮 著

嫡孫 佐藤 密校

人

抑平安京は、一千餘年の都にて中華にも其例あらん、畿内七道は天武帝の御時勅によつて定められ、其中にも東海道其冠たり、○も草薙の餘光晃々として、四海の湖は東日に照されて、浪の音穩なり、干戈の威、日々に新にして、梟鳥敢て翔らす、賞罰嚴にして、江府迄の往來貴賤となく、老幼となく、夜となく、晝となく、公卿は勅を蒙りて春の御使、藩屏の諸侯は、かはるゝ參勤或は商交易斗、藪の桑門、風騒の歌枕、俳諧の行脚、伊勢參り、富士詣、驛路の鈴の絶間なく、馬あり竹輿あり、舟あり橋あり、泊りゝは自在にして、酒旗所々に翻飜たり、馬に鈴を附るを



驛路の鈴といふ、むかし毎年貢を馬にて納め奉る時、又は公卿國の任有守護に下り給ふ時、此鈴を付けたる馬は夜も關の戸を明て通したるなり。

衣笠内大臣

○旅人の山路をはふる夕霧に

むまやの鈴の音ひしくなり

爲家卿

○道細き里の驛の鈴鹿山

ふりはへ過る友よそふなり

道遙院

○神もさそふりくる雨はしの塚の

むまやの鈴の小夜深き聲

國王七鈴を以て、七道へ遣すたには、官使、一つつゝ賜ふなり、是を印にしてむまやへつくことにふりならし宿るなり、其所を驛路といふ、驛舎は京師より五十三驛なり、洛陽散葉坊三條橋は、東海道の喉口にして行程も是れよりかそひ始

る、木の間へ神社佛閣列り、花洛の勝景こゝにとまると、橋下の流れは水上に鴨皇太神宮ましますにより鴨川といふ、名産硯石水乾すして墨色に艶あり、五月の頃は日日に百魚を漁て調貢し奉る至て美味なり、良には台嶺巍然として王城の鬼門を守り悪魔を拂ふ、麓に赤山御蔭の社一條寺の降り松、石川丈山詩仙堂、白川の瀧、如意の嶽、淨土寺山の大文字、月待山の麓には銀閣寺あり、神樂岡吉田の社は神祇官にして日本の神々を鎮め祭る、其南に眞如堂、黒谷西に百萬遍、東に永觀堂、或は鹿谷談合谷、松蟲鈴蟲の古墳、光靈寺、若王寺、五山の上の南禪寺、山腹に駒ヶ瀧山峰を獨秀峰と云ふ、三條橋上より南を眺むれば華頂山、智恩院、圓山の山亭には四時花たへす、蹴鞠の杵音、糸竹の宴會、此院々にて遊興を促す、長樂寺、東大谷、双林寺の西行庵、大雅か跡、祇園女御の祠跡、祇園の社、二軒茶屋、赤蔽膝、翩々として、豆腐切る音、丁々たり、下河原の醉歌の聲、祇園町の待宵、雲の霄つら花の顔露打の作り花、香煎の匂ふ筒井筒、いつくも共に秋ならぬ紅葉の色、の小町紅、清風まねく奇麗扇、九ツ十のうない乙女の拍子よくどんどんとんと、手まり歌、春は曙、夏は夜、四條河原の夕涼み、蟬の羽薫る染帷子、雪の肌をわれ



や一力、見の見ゆる最負組芝居は早雲花矢倉、繩手に雨止地藏尊、建仁寺の陀羅  
 尻の鐘六波羅蜜寺の寺向ひ、鐘六道能化の南無地藏、安井の金比羅蛙か池、蘭溪  
 菊水午王の社寺は棒のはし柱、七観音に伽羅の像、八坂の庚申八坂塔、高臺寺の  
 姥櫻、幽艶たり萩の花、靈山の樓閣より洛陽の萬戸鮮なり、鳥部山大谷三蜜坂經  
 書堂仲光寺子安の觀音、車舍馬止め、是より清水寺に至る、地主の櫻音羽の瀧、梟  
 の水景清か爪形南の方を歌の中山清閑寺といふ、九重の丹楓、要石豊國山阿彌  
 陀峰繼信忠信の石塔、三島社、東を小松谷と云ふ、法然上人の舊跡の寺あり、是よ  
 り、苦津滅地流谷とて山科過て大津へ出る往還なり、大佛殿は天正年中豊臣秀  
 吉公の御建立にして、盧舍那佛を安置し、樓門仁王の大像内には金色の高麗狗  
 あり、昔豊臣の社に有しとそ、又南に石塔婆あり、世俗秀吉公の古墳と云傳ふ、大  
 鐘は廻廊の外にあり、三十三間堂を蓮花天院といふ、一千躰の觀音を安置す、堂  
 前に夜泣の池の面の燕子花濃紫の色うるはしく、此處の美觀なり、後堂にて大  
 箭數あり、諸侯の家臣茲に來りて射術をためす、東に妙法院親王の御殿有り、日  
 吉社、智積院、養徳院、池田町には梵論々々の寺あり、明暗寺と云、其南の柿園は松

永貞徳居士の遺跡なり、新熊野觀音泉涌寺に涌泉あり、又佛牙の舍利世に高し、  
 帝王皇妃の御陵も當山にあり、東福寺藤原氏の菩提所にして、開基聖一國師  
 五山の其一なり、初は地名を月輪と號す、九條關白兼實公の山莊なり、此故に月  
 輪殿下と號す、大相國光明峯寺道實公禪法歸し給へ、此地を聖一國師に附し、南  
 都東大寺興福寺を合せて東福寺と號す、通天橋の紅葉は蜀錦の如し、兆殿司虎  
 關の兩僧も此寺に住し、思園池の龍圓柏の唐木等名所多し、三ツの峰、稻荷社は  
 元明帝和銅四年二月初午日出現し給ふ、延喜八年贈大政大臣藤原時平公三峰  
 の社を修造す、永享十年社を山下に今の地に移す、南に深草山寶塔寺石峰寺の  
 五百羅漢の石像、極樂寺の舊跡、照宣公の古墳あり、元政法師の住所伏見の桃山、  
 大和大路を北へ登れば、五條橋河原院の古跡、籬ヶ島籬ヶ森兩本願寺佛光寺の  
 甍まで三條の橋上より一眼にさへきりて平安京の佳景なり。

◎小朝拜

俊頼朝臣

○庭もせに引つられなれる諸人の



立居るけふや千世の初春

つれく草云吳竹はほそく河竹は葉ひろし、御溝に近きは河竹仁壽殿の方に  
よりに植られたるは吳竹なり

後 京 極

○むらさきの雲の春風長閑にて

花にかすめる雲の上かな

光廣卿曙記云、延喜の御事をこそ又なき例にも申めれと、それもはしくは句  
奴淺りたるよし古き文にも見へたり、今關のひかし戸さしわすれて、天ヶ下卓  
錐(?)の地も穩ならずと云ふ事なし。

◎關寺小町蹟

壯襄記曰、三皇五帝の妃も漢王周公の妻も、いまた此驕をなさず、衣には錦繡を  
かさね口には海陸の珍珠をとくのへ、身には蘭麝をかほらし、常に和歌を詠し  
て萬の男の賤くのみ思ひくらし、女御更衣に心をかけたりし程に、十九にて父  
におくれ、廿一にて兄に別れ、廿三にて弟を先たてしかは、單孤無縁の獨人とな

りてたのむかたもなかりき、いみしかりつるさへ日毎に衰へ花やかなりしも  
顔年々にすたれつゝ心をかけたるたくひも疎くのみなりしかは、家は破れて  
月のみむなしくすみ、庭は荒て蓬生いたつらにしけるまてになりければ、文屋  
康秀三河椽になりて下りけるにさそはれて

○わひぬれは身をうき草のねをたへて

さそふ水あらはいなんとそ思ふ

とよみて次第に、をちふれゆく程に、果には野山にさすらへける、人間の有様こ  
れにて知るへし。

◎園城寺

長閑の山櫻は入相の鐘にさそはれ、にほてる秋の日は、さゝ波にたゝへ、星霜累  
れは騷擾の愁なきにしもあらず、治承には源三位に荷擔し平家の暴逆に伽藍  
を○せられ、行尊はあさちヶ原に鶉なくらんと述懐を詠し、天地老て山河あら  
たにて、龍虎争ふて草木腥し、漸右大將頼朝卿に當山より牒狀を捧しかは平家  
没官の地を寄附し給ふ事東鑑に見へたり。



◎崇福廢寺 一名志賀寺又建福寺

定家卿

○仙人の光りたつねし跡やこれ

み雪さへたる志賀の明ほの

むかし志賀寺の上人として、行學勳修の聖才をはしけり、速にかの三界の火宅を出て、永く九品の淨刹に生れんと願ひしかは富貴の人を見ても、夢の中の快樂と笑ひ、容色の妙なるに逢ふても迷ひの前の着想を憐む、雲を隣りの柴の庵しはし計りと住ほとに、手つから植し庭の松も秋風高く成にけり、ある時上人草居の中を立出て、手に一尋の杖をさらへ、眉に八字の霜をたれつゝ、湖水靜かなるに向て、水想觀をなして心をすまして一人立給ひけるところに、京極の御息所志賀の花園の春のけしきを御覽して御歸り有りけるか、御車の物見をあけられたるに此上人御目を見合まいらせて、おほへす心迷ふてなましゐるか、にけり、遙に御車の跡を見送りてたちたれとも、我思ひはやるかたもなかりければ、柴の庵に立歸りて本尊にむかひ奉りたれとも、觀音の床の上には思想の

化のみ立そひて、稱名の聲の中にはたへかねたる大息のみそつかれける、偕もことしくさむ事もやと、暮山の雲をなかむれば、いと心もうき迷ひ、閑窓の月に嘯けは、忘れぬ思ひ猶深し、今生の妄念つゝに離れすは後世の障りと成りぬへければ、我思ひの深き色を御息所に申て心やすく臨終をもせはやと思ひて、上人孤裘に鳩の杖をつき、なくな京極の御息所の御所へ参りて、鞠の○○のかゝりの本に一日一夜を立たりける、餘の人は皆いかなる修行者こつしき人やらんとあやしむ事もなかりけるに、御息所御簾の内よりはるかに御覽せられて、是はいかさま志賀の花見のかへるさに、目を見あはせしひちりにてやおはすらん、我ゆへにまよは、後世のつみ、誰か身の上にか留るへき、よそなから露斗りの言のはに、なさけかけはなくさむ心もこそあれと思し見て、上人是へとめされければ、わな／＼と泣き給ひける、御息所は偽りならぬ氣色の程あはれにも事もなく、さめ／＼と泣き給ひければ、雪の如くなる御手を翠簾の内より少しさし出させ給へたるに御手に取つきて



○初春のはつねのけふの玉はしき  
手にとるからにゆらく玉の緒

とよまれければ御息女取あへす

○極樂の玉のうてなのはちす葉に  
われをいさなへゆらく玉の緒

と遊はされ聖の心をそなくさめ給ひける、道心堅固の聖人苦修練行の尊者たるもとけかたきは發心修行の道なり。

○唐崎の一ツ松

夫唐崎の靈松は、株の圍り五尋高さ三丈餘、數千の枝葉四方へ繁りて、あるは社頭へなひき、あるは湖上へ秀て、遠く眺むれば翠巒の如く、近く視れば蟠龍に似たり、四時蒼々として君子の操を顯はし霜雪を凌ぎて千歳を庸とす、にふてる朝日かけは松の葉こしにかゝやき浦吹く風の夕しくれに、秋しらぬ色を満し、春は霞にこめて朧々たるに、沖の舟ちひさく、夏の月のすゝしきに悠々たるさゝ波の音、琴の調初あらしあられふる夜、雪つもる曙みな此松の勝景なるへし、

されは千歳をふれば其精○○となり、其實を嚼へば長生を得、脂は地中に沈んで茯苓となり、又龍骨となる、青湖の貢丁固か夢始皇は五大夫に封し、玄葬の歸路をしらしむ、本朝にも住吉高砂曾根武隈？の名松ありといへとも、此古松第一にして又第二にならふものなし、かゝる靈樹の蔭にやとり千とせの美とりうるも又めてたきためしにやあらん。

○志賀の浦や松をあらしの吹しふり  
さゝ波遠く氷る水うみ

烏丸新大納言 光 祖 卿

○四明嶽

夫四明峰は山州第一の高嶺にして、山水清暉を含み千里に目を極む、先づ西南には 帝城の巍然たる粧ひ、鴨川大井の二流愛宕高雄の連峰雲端には、淀川の流れ長し、遠く見渡せば難波津の金城、其西には滄海洋々として帆かけ舟は昆蟲のうこめくに似たり、東南の眼下には唐崎の一つ松、大津の浦、粟津の城、勢田の長橋、北の方は琵琶湖のさゝ波悠々として山水の美こゝに止る、はるか三



上の翌巒比良膽吹の双峰黛色深く、沖の島竹生島も浪の上にならひさく、今津海津の商船山田矢走のわたし舟は水雲の中に鮮なり、會稽の記に四明の高嶺雲に映すと書しも同日の論此峰も四方明の名あり、秋の日雲消し天外蒼々たるときには、駿河の富士山此峰より見ゆるなり、時世はかはれとも煙霞はかはらす、人物は改れとも風流改らす、我立杣は帝都の繁華琵琶湖の八景、皆目中の客となりて、城は二州の絶勝たるへし、長嶽といふは長は根にして堅し、又封の名なり、丑寅の方則一陽來復の後、丑は繫は演て東方孟陬の辰なり、故に王城の鬼門を守り悪魔を殺ふとは此謂なり、世俗鬼門柱といふは此長嶽を云ふなるへし。

◎源氏間

むかし紫式部石山寺に參籠して源氏物語を作りしところなり

石山記曰、式部は右少辨藤原爲時朝臣の女上東門院の女房にて侍りたるに、一條院の御伯母選子内親王より、めつらしからん物語や有と女院へ申させたりけるを、式部に仰せて作せられければ、此事を祈り申さんとして當山に七ヶ日こもり待りけるに、湖水はるくく見わたさせてさまくくの風情眼に遮り心にうかみけるを、取あへず大般若の料紙の内陣にあるを本尊に申うけて思ひあ

へる風情を書つゝけ玉ふ、此式部は日本紀にくはしければ、日本紀の局と云ならはしける、順徳院御紀云、源氏は第一〇〇〇〇非人間之所爲不可説之事なり、第二歌秀逸是又何人及之我朝之最上也、又花鳥序に曰我國の至寶は源氏物語に過たるはなかるへしと云へり、河海折云八月十五日の夜月湖水にうつりて心の澄わたるまゝに、此物語をわすれぬ先に佛前の大般若に次て明石の兩卷を書初しとそ、夫より次第に書きくはへて權中納言行成卿清書し玉ひ齊院へ參らせけるといふ、天臺六十卷をうかゝひ、一心三觀の妙理を悟り得るといひ傳ふ。

長明無名抄云、さても此源氏作り出たるこそ、思ひは思ひは此世のひとつめつらかにおほゆれ、誠に佛に申乞ひたるしにやとこそおほゆれ、凡夫のしはさこそ覺へぬ事なり云々、惟中は續無名抄云、源氏は和國の奇筆なり、細川玄旨法師の扈從に宮木孝庸と云ひし武士因州の牧に仕玉ふ、若年の時より隨て委曲に傳授して承りぬ、かくの如くの口決ともあり、或時孝庸玄旨法師に、世間のたよりになる書は何をか第一と仕るへきかと尋られければ、源氏物語と答給



ひし、又歌學の博覽第一のものはと問ひ給ひは、同源氏と答させ給ふとそ、何もかも源氏にてすみぬる事と承りぬ、源氏を百篇つふさに見たるものは、歌學の成就なりと宣ふよし孝庸はかたりき。

紫式部畫像之讚

有門空門亦有亦空門非有非空門

○こゝろたにいかなる身にかかなふらん

おもひしれともおもひしられす

○誰か世にかなからへて見んかきとめし

あとはさへせんかた見なれとも

右近衛三護院信基公御讚式部影像の畫は狩野古近

天臺四勺文を讚となしたる事物語につき深き故ある事にや

河海抄云、式部は檀林院贈僧正の許可を蒙りて天台一心三觀の血脈に入れり

○してより紫野雲林院の幽閑をしめけるとそかたくゆへあるにや。

◎石亭 栗田郡山田にあり

山田渡口の村中に、木内小繁とて家久しき村翁あり、此人生得若年より和漢の名石を好んで年來諸國よりあつめ、是を翫ふこと數十年に逮へり、住居の軒端風流にして、庭に松櫻をうへさゝめなる書院に石○あり、外雜話を禁す、席上よりはるかに見はたせは、湖水淼茫として比惠の高根唐崎の松眞野堅田志賀の都の跡、湖てる沖には山田矢矧の舟片々として皆此亭をもてなすかと思はる石は神代の勾玉をはしめ、我國諸州の産人の國の産寄石化石、天狗の爪、水入の紫水晶迄、あるは臺にかさり、あるは小笥に入て錦を敷て塗籠に家藏する事都て二千餘石ありとそ、所謂普の石鼓をたゞき陶潜か醉石に臥し、李徳か醒石に起て月に日に朝に夕に是を愛す、海内其名高く四方好事の輩貴となく賤となく、こゝに駕を枉て數々の石を觀る事多し。

◎活人石

草津驛駒井氏の家にあり、高さ貳尺餘、幅壹尺五寸中にて少し廣し、色は海松葉の如し、近隣破屋の庭に在りしを近年此化石の銘を中山亞相公染筆し給ふ、駒井氏一軸として家藏す。

◎ゆるき巖

金瀬村金勝寺にあり、數十人の力を以て動せとも更に動かす、身を淨めてわすかに一指を以て押せば忽ちゆるき動くなり。

揮塵錄曰、宋の政和年中靈壁縣より、一巨石を貢く、高さ二丈餘、千夫是をかけと



も動かす、或人の曰く是神物なり、よろしく表幣すへし、故に題して慶雲萬態と號して金幣を以て、其上にかけ動すに須刻にして苑中に至る、是らの類にや比せん。

◎美松 うつくしまつ 街道筋本松村山中にあり

美松と號すること、松の葉細く艶ありて四時變せず、蒼々たり、松の高さ小大なり、大樹は根より四五尺迄は株常の如し、夫より枝數十にわかれて近く見れば蓋の如く、遠く眺むれば側拍アキツラフに似たり、此山中に限りて悉く同木なり、隣山は常の松にして美松一株もなし、又他所へ移し或鉢植などにするに程なく枯れて育せず、和漢松の部類を考ふるに、いまた此類を聞かず、遠近こゝに來りて始めて見る人賞嘆せずと云ふことなし、此風土の奇なり。

◎萬里小路藤房卿終焉地 三雲村の南妙感寺村にあり

建武二年後醍醐帝へ諫奏ありしかとも、御許容なく終に遁世し給ひ、所々遍歴の事太平記及吉野拾遺に見へたり、老後此山へわけ入帝より賜りし大悲像を本尊とし此寺をいとなみ一首の歌を詠し給ふ。

○世のうさをよそに三雲の奥深く

てる月影や山すみの友

かく詠しこゝに錫を止め給ふ事數十年に逮へり、遂に康歴二年三月二十八日遷化し給ふ年八十五歳。

◎筆捨山 坂の下一ノ瀬川の邊にあり

里諺云、狩野古法眼東國通行の時、此の山の風景を畫にうつしてんやと筆を取るに、心に及はず、山間に筆を捨てしとぞ、夫此山は麓に八十瀬川を帶て蒼松の黛色濃かにして、奇巖所々にならひて松根是かために曲に撓られて造り木の如し、朝あらしに琴瑟の聲、春夜の雨肅々たり、月の影に龍蛇の影をあらはし、鶴の聲に君子の徳を表はす、葉は秦帝の雨を凌かせ花は宓妃の春に老たり、此山脈つゝきて岩根の東方に大黒石蛭子石觀音岩女夫岩など形を以て名に呼皆山腹にあり、轉石は街道の左にあり、むかし山峯より爰にころひ落たるとぞ、又向ふに當りに錫杖嶽巖々と聳て風色斜ならず、吾妻の通行參宮の貴賤まつこゝに憩ふて時を移す勝地なり。



◎名古海唇樓

此浦より春夏の間、其形鳳輿行幸羅蓋前後にあり、又諸侯行列の態又は樓臺宮殿の相鮮かに見へて、漁人時に見ることあり、忽ち須臾にして消々となる、又尾州鳴海の浦杯に春の頃見ゆるとなり、諺に云伊勢大神宮の熱田の宮へ神幸あるといふ、又西國北國などにもあり、案するに湖水の氣陽精に乗して立昇るなり陽炎の類にやあらん。

◎間遠渡口

桑名七里の渡口をいふ、むかし天武天皇、友皇子におそはれ、尾濃へ亂をさけ給ふ時、此渡に舟をいふ、間遠なるに、西に朝くま二見の浦、鳥羽の湊、東州の國境なり、渡口七里の間、風景斜ならず、西南に朝くま二見の浦、鳥羽の湊、東には三遠の浦々遙に見へて、眞砂の海路なり。

曙記云、桑名に着ぬ、城のあるし屋形打たるあけのそ〇、舟よそひたてられ、やかてめしうつりぬ、伊勢尾張のあはひの海つらほのほのと霞る月のゑんなるに、なみは、時々白く立てかこの呼聲もいかめしく、舟くら〇してうたふ月もやうく入方近くなれば人をしつめて

〇はるくくと過にしかたの人やあらぬ

波はむかしの伊勢の海つら

光 廣 卿

◎津島渡

貞應海道記曰、七日市驛を立て津島の渡と云所を舟にて下れば、芦の若水青みわたりて、つなかぬ駒も立はなれず、菅のうき葉に浪はかくれとも、鶏面蛙はさなく氣もなし、とりこす棹のしつく袖にかゝりたれば

〇さして物を思ふとなしにみなれ棹

みなれぬ波に袖はぬらしつ

渡りはつれば、尾張の國にうつりぬ、片岡には朝日のかけうちさして、焼野の草にひはり啼あかり、小笹か原に駒あれて〇しけしき引かへて見ゆ。

◎豊臣秀吉公出誕古蹟

尾州海東郡上の中村なり、佐屋廻り岩塚より二十丁斗り北なり、村中に太閤山常泉寺といふ、日宗の寺あり。

八月十八日豊太閤薨去の日法筵ありて群集すとなん、又加藤虎之助清正の出生所も此南の隣村下の中村なり、氏神は今に於て裔孫より候補ありとなり、又淺野蜂須賀其外尾州出生の諸侯此ほとりに古蹟多しとなり。

◎呼續濱

宮築出し鳥居崎より關寺村のほとりまでないふとそ



築出町の西に裁斷橋といふあり、又裁隨橋とも書す、欄干に銘あり、天正十八年六月十二日相州小田原陣中に於て堀尾金(?)助討死せし追福の爲に此橋を架す、慈母哀憐の餘り三十三年供養の儀式或は法名なと記せり。

○鳴海かた夕なみ千鳥立かへり

友呼つきの濱になくなり

○藤原師直公配所

愛知郡戸田村舊跡、龜井山龍泉寺といふ禪刹あり、治承三年十月十五日大政大臣師長公平清盛の爲に左遷せられ給ふ。

○千鳥塚

芭蕉翁の句碑あり、山王山にあり、南は大洋渺々として南伊勢朝熊嶽野間の内海、あるは三河の伊良子崎まではるかに見へわたりて風景の地なり、當驛千代倉に蕉翁の自書自讚の墨跡を家藏す。

○彌さめの里松風の里よひつきは

○夜明てからかさ寺は雪のふる

○ほし崎の闇を見よとや鳴千鳥

はせを

太田道灌は和歌の達人にして、暮景集を著はさる、ある時出陣せられしに、尾州鳴海の磯邊を通られし時闇の夜なれば潮の満干しれず、軍勢皆躊躇す、その時道灌古歌を吟す

○遠くなり近くなるみの濱千鳥

鳴く音に汐のみちひをそしる

是を諸軍にさかし、千鳥の聲の遠近を聞はけて安々と濱邊に越へる、之らを文武兩道の大將とやいふへき、芭蕉翁の星崎の句も此古歌より出たりと覺ゆ。

○今川義元塚

有松村と落合村の路傍にあり、此所を屋形狭間或は桶狭間といふ、今川上總介義元戦死の所なり、古松の下に標石あり、今川上總介義元戦死の處と鐫す、明和八年十二月千代倉氏の建る所なり、猶此邊に古墳多し。

○八橋古蹟

地鯉鮒より八町斗東の方牛田村の松原に石標あり、是より左へ入事七丁斗りこゝに一堆の丘山ありて、古松六七株、其傍に凹なる池の形の芝生あり、是むか



し杜若の有し跡といふ、北の方に遇妻川の流れあり、是に土橋をわたす、是は八ッ橋をわたせし流れといふ、却て此邊田畑にして八橋燕子花の傍もなし、むかしは此處官道にして今も鎌倉道の名ありて道幅も廣し、かの丘山に業平塚といふ石塔婆あり、後來準へ立るものならん。

光行記行云、○して參河國八橋のわたりを見れば、在原業平杜若の歌よみたりけるに、皆人かれ○のうへに涙落しける所よと思ひ出られて、其あたりを見れともかの草とおほしき物はなくて、いねのみを多く見ゆる。

○花ゆへにおちしなみたの形見とや

稻葉の露を残しおくらん

貞應海道記云、かくて三河國に至りぬ、雉鯉鮒か馬場を過て數里野原を過一番の橋を名つけて八橋といふ、砂に睡る鴛鴦は夏を辭し去り、水に立る杜若は時を迎て開たり、花はむかしの色かはらす咲ぬらん、橋も同じ橋なれとも幾度か津くりかへつらん、相如か世をうらみしは肥馬に乗て昂僂にかへり、幽子身を捨る窮鳥にたくゐて當橋をわたる八橋よ八橋よくも手に物思ふ人は昔も過

さや、橋柱よ橋柱よ、のれも朽ぬるかむなしく朽ぬるものを今も又すく

○住わひてすくる三河の八橋を

心ゆきても立かへらはや

夫八橋燕子花の名所を賞する事は古今集及び伊勢物語より出たり、在中將の吾妻下りを此物語に編集す、原此書は古今説々多し、世に業平朝臣の自記といひ、或は寛平の官女伊勢の御○御作亦是諾冉の尊のことのまきはひより、男女物語といふを伊勢の二字に妹背を略訓して含めり、又清輔の袋艸紙には業平の作れるなりとぞ、歌は自他を論せず便りに従ふて同じ人の和歌のやうに云つらね、多くは萬葉集の歌を入なりとぞ、一説には齋宮の事を詮とするゆへに伊勢と號す、和泉式部か本には齋宮の事を始に書りといふ、加茂の眞淵は古歌によりて、行幸の事を書り、これ業平歿後の事なり、服部元喬は在中將の論を著して、其人の風俗と行事と一ならざる事を論す、愚按するに、かの卿の風俗を體にして古歌をえらみ、往昔の談達なる文をつらね、語を熾婉に基きて後人艶文家の作なりと、必しも盡く在氏に出す、或曰、二條家三代集傳授にも初に此物語



を讀しむとなり、源氏物語は虚を實に書たり、此物語は實を虚に作れり、然るに僻案に虚を實にするゆへに、惑説多し、實を實にし、虚を虚に見れば、紛るゝ事なし、是伊勢物語を讀口傳なり、業平朝臣一期の間の事を書あらはし、夫に古歌を書くわへあるは上の句下の句杯を取かへたる所は、作物の習ひとしるへし、此段の中に水ゆく川のくもてなれば、橋を八つわたせるによりてなん、八橋と云けるを、真淵は心せく川と評し、其水を四方の田圃の用水にとて、八流水の小川を堀て、是に橋をわたしたり、此ゆへに、蜘蛛手の如く見ゆると書たり、阿佛尼鎌倉下りの時には、早廢して橋も杜若もなきと見へたり、然れば、年久しき廢跡これと此伊勢物語より出て、杜若の幽艶たるを思ふ、一名顔<sup>カ</sup>吉<sup>ホ</sup>花<sup>コ</sup>といふ。

○夏草のちほき中にもかほよ艸

折袖までもむらさきになる

◎淨瑠璃姫墳 西矢矧左の方圃の中にあり

むかし矢矧の宿の長か娘美艶の女伶なりしか、平家の盛衰を十二段に作り諷ふ、薬師十二神將に比すれば、淨瑠璃御前とよふ、今の淨瑠璃の始りなり。

◎宮路山 三州寶飯郡赤坂の上方南にあり

十六夜日記云、山遠き原野を分ゆく、ひるつかたになりて、紅葉いと多き山に向て行、風につれなき所々、くちはにそめかへてけり、ときは木ともに、立まじりて青地の錦を見る心地す、人に問へば、宮路山といふ。

○しくれけりそむる千入のはては又

紅葉のにしき色かへるまで

此山道はむかし見し心地するに、ころかはらねは

○まちけりなむかしもこへし宮路山

おなししくれのめくりあふ世を

山の裾野に、竹の有所にかや屋一つ見ゆる、いかにして何の便りにかくてすむらんと見ゆ。

○ぬしや誰山のすそ野に宿しめて

あたりさひしき竹の一むら

◎赤坂



光行記云、宮路山を越す程に赤坂といふ宿あり、こゝに有ける女ゆへに、大江の定元か家を出けるも哀れなり、人の發心する道其縁一にあらねとも、あかぬ別れをおししみし迷ひの心をしもかへし、この道にもむきけり、有かたかほゆ。

○わかれしにしけりにはてゝ葛のはの

いかてかあらぬかたにかへりし

貞應海道記云、矢矧を立て赤坂の宿を過むかし此宿の遊君花の顔こまやかにして、蘭質の秋芳しき女有りけり、顔を瀋安仁か弟妹にかりて契りを三列吏の妻妾に結へり、妾は良人に魁して世を早し、良人は妾におくれて家を出つ、知らず利生の菩薩の化現して夫を導きけるか、又しらす圓通大師の發心して妾をすくへるか、○善知識大なる因縁なり。

○いかにしてうつゝかみちをちきらまし

夢おとろかす君なかりせば

○二見道

〔御油より左へわかれて八幡宮をへて本野か原にかゝり豊川に至る是古への街道なり。〕

光行記云、ほむの川原に打出たれば、四方の海かすかにして山なく岡なし、秦田の一千里を見わたしたらん心地して草土ともに蒼茫たり、月の夜の乃そみいかならんとゆかしく覺ゆ、しける篠原の中に數多ふみつげ道有て、行末も迷ひぬへきに、故武藏のつかさ鎌倉執權武藏守平泰時道のたよりの輩におほせて、植おかれたる柳もいまた陰とたのまん迄はなけれども、かつゝまつ道のしるへとなれるもあはれなり、もろこしの周公且は周の武王の弟なり、成王の三子として燕といふ國をつかさとりき、むかしの西の方をおさめし時ひとつの耳棠のもとをしめて政を行ふ時、つかさ人より始めてもろゝの民に至るまで、其本をうしなはず普く人の愁をことはり、重き罪をもなためけり、國の民こそりて其徳政をしのふゆへに、周公去にし跡迄もかの木をうやまひてあへてきらす、歌をなん作りけり、後三條天皇東宮にておはしましけるに、學士實政任國に赴く時、國の民にとひ耳棠の詠をなすともわするゝ事なかれ、多くの年の風月を遊ひといふ御製をたまはせたりけるも此心にや有けん、いみしく忝し、かの前の司も此召公の跡を追てはくゝみ物をあはれむ餘り、道の邊の往還迄



も思ひよりて植おかれたる柳なれば、是を見ん輩皆かの周公を忍ひけん、國の民の如くにちしみそたてゝ、行末の影を願ん事其本意はさためてたかはしとこそおほゆれ。

○栽置しぬしなき跡の柳はら

なを其影を人やたのまん

よかはといふ宿の前を打過るに、ある者のいふを聞は、此道はむかしよりよくかたなかりし程に近き頃、俄かにわたふつの今道といふ方に旅人多くかゝるあいた、今は其宿は人の家居をさへ外にうつすなとそふるきをすてゝ、あたらしきにつくならひ、定れる事と云なから、いかなるゆへならんと覺束なし、昔よりすみつきたる里人は今さらぬうかれんこそ、かの伏見乃里ならねともあれまくおしく覺ゆれ。

○おほつかなよかはの川のかはる瀬を

いかなる人のわたりそめけん

○山本勘助故居

〔寶飯郡小坂井の東半久保村にあり、今第跡田圃となる、半久保の長谷寺に勘助の守佛摩利支天の小像を安置す。〕

○煙巖山鳳來寺勝岳院

〔三州設樂郡門谷村の山頭にあり、天臺真言の二派に分る。〕

○猿か馬場

〔堺川より東、左右原山にして、小松多し、風景の地也、北の方に大岩あり、高さ十丈餘、中二十丈斗、猿か馬場の茶店に柏餅を名物とす。〕

夜はほのくと明るに、吉田を立てしはらく行て、二川の町を出て海道の松蔭を行く、遠望せしに東の北によりて富士の山いとしろく雲のやうに、さすか山容しるく見ゆる嬉しくおとろかれて

○白妙の雪はかすまでうちなひく

雲ならぬふしの雲にうかへる

○汐見坂

〔白菅の東の坂路をいふ、眼下に滄海を見れば、潮見坂の名あり、所謂遠州七十五里の大灘、舟にさへきり、弱水三萬里の滄海あり、渚は潮見坂の名あり、所謂遠州七十五里の漁舟は雲の浪に見へかくれ、浪間の鵜浦はの千鳥、皆此潮見坂の眺望なるへし。〕

○富士見松

潮見坂にあり、はれわたる空には、松の木の間より鮮に見ゆる。

○高師山

白菅より續て北迄の間を云、海邊の眺望、旅中の奇觀なり。

東關記行云、三河遠江の堺に高師山と聞ゆる有り、山中に越かゝる程に谷川の流れ落て岩瀬の波ことく聞ゆ、堺川といふ。

○岩つたひ駒うちわたす谷川の